

共同研究 半七捕物帳 (三)

序

浜田雄介

「槍突き」小考

加藤文明子

「蝶合戦」小考

鄭智恵

「あま酒売」小考

本田逸朗

「海坊主」小考

高橋昭男

「旅絵師」小考

岸本梨沙

「少年少女の死」小考

小山恭平

「一つ目小僧」小考

市地英

序

浜田雄介

本誌第十九号より開始した共同研究の第三回である。母体となっているのは大学院における近代文学の演習であり、出発点となった問題意識は第一回の序に記した通りである。

ただし、研究が進むにつれて、あるいは時が過ぎるにつれて、議論や分析の力点は少しずつ変化しており、第二回の序には「江戸の外側」の世界が議論においてしばしば問題になったことを記している。その問題意識は今回の収録論文でも継続しており、加藤論文は獺師やサンカの考察から江戸人が持っていた「ソト」の世界への視線を分析し、高橋論文は作品執筆の背景に関東大震災を指摘しつつ海という自然の脅威を論じる。また岸本論文が描き出すのは、江戸から遠く離れた奥州を舞台に、キリシタンと関わる芸術家の物語である。

「外側」と言えば、江戸の外ばかりではなく、この世の外という世界もある。「半七捕物帳」には、怪談なのか捕物帳なのか、区分けの難しい作品も多く、そのことも今年度、しばしば話題となった。本田論文は、半七の探偵行為とは離れたところに展開する物語に蛇婦譚の伝統を重ね、市地論文は、怪談が探偵小説と結びつく際の表現上のメカニズムを説明する。

このほかに、鄭論文は、異文化間のイメージ比較を通して、作中に現れる蝶の日本的な機能を分析し、小山論文は冒頭に出てくる自転車を手がかりとして「災難」をキーワードに作品の子供観を検証する。さまざまな小道具や設定への着目の有効性はむしろ作品の読みへの寄与で計られるべきであろうが、そのような小道具の配し方自体に、作者の世界観を見て取ることも可能かもしれない。

共同研究の参加院生の専門は、近代文学のほか、中世文学、近世文学、国語学などそれぞれである。それゆえに、思わぬ広がりが出て興味深い議論になることも多いのだが、一方で議論の詰めが甘くなる面があるとすれば警戒しなければなるまい。文学作品としての普遍性と多層性を考究することと、「半七捕物帳」が近代文学であるという当たり前の事を前提とすることとは、まったく矛盾しないと、現時点では考えている。

従来に引き続き、テキストは流布本である岡本綺堂『半七捕物帳(二)』および『半七捕物帳(三)』(ともに光文社文庫、新装版、平成十三年十一月)を用い、必要に応じて異同を記している。また各論文はそれぞれ扱った作品の謎解きや結末に触れている。未読の方にはご注意を願う。

「槍突き」小考

加藤 文明子

「槍突き」は大正八年二月『文芸倶楽部』において「半七聞書帳」として書かれたものの二作目にあたる。「聞書帳」シリーズは、半七以外の岡っ引きが手がけた事件を半七老人が語る、といった体裁を取っている。ことに「槍突き」に関しては又聞き之又聞きであり、大正十年の初刊^①までは、半七の親分であり義父でもある、神田の岡っ引き吉五郎^②が人づてに聞いた話として綴られている。また、大正十三年『半七捕物帳 第四集』以降、「聞書帳」の大部分が半七のものとして書き換えられた中で、「槍突き」「小女郎狐」「旅絵師」の三編はあくまで「聞書帳」として残っている。

女の顔を切る通り魔事件が流行していた明治二十五年の春頃、半七老人は、通り魔事件の類でもひととき有名な高いものとして、槍突き事件を語り出す。

文化三年（一八〇六）正月の末頃、江戸の町で、闇の中から往來の人間をむやみに槍で突き殺す事件が頻発した。犯人は解らず仕舞いで沙汰やみとなり、再び文政八年（一八二五）の秋にかけて槍突きが続発。住民は縮み上がり、同心や岡っ引きたちも血眼となった。葺屋町に住む老練の岡っ引き七兵衛は、十月のお十夜の日に手前から奇妙な話を聞く。前夜、娘を乗せた駕籠が柳原の堤で槍突きに

突かれた。しかし中を窺うと、死んでいたのは黒猫だったというのである。そこで七兵衛が十夜講に向かう際に現場を通ると、彼の娘、そして槍突きに遭遇するが、取り逃してしまふ。

化け猫の噂も相まって、女子供はいよいよ怯える。七兵衛は件の駕籠屋に空駕籠を担がせて犯人を陽動しつつ、自分に江戸中の竹藪を毎晩見回らせるも、なかなか成果は上げられず。そのうちに、嫉妬から便乗殺人をした長三郎という職人を召し捕った七兵衛は、彼の博奕仲間の猟師作兵衛が、宵の口に河岸の竹藪へ入っていったとの話を聞き出し、犯人と凶器を確信する。

先に向かわせた手下を追う道中、七兵衛は剣術指南の子息俊之助と遭遇。女装して釣り寄せた槍突きを逃した彼は、野良猫を身代わりに化け猫を装い犯人を驚かすという意趣返しをしていたのだ。すると二人の話を立ち聞きしていた作兵衛が、自分の身の危険を知り切り込んでくる。七兵衛は俊之助と共にこれを捕らえ、文政八年の事件は落着する。

詮議の結果、文化三年の槍突きの犯人は、作兵衛の兄の作右衛門で、兄弟ともに、甲州の山奥から獣物けだものを売りに江戸へ出たところ、繁華な町と着飾った人々に妬みを覚え、槍で突き殺すに至ったのだという。兄は既に死去しており、弟の作兵衛は引き回しの上磔刑になった。なお、冒頭にある女の顔切り事件の一節は、新社版以降に加筆された部分である。逆に半七が槍突き事件を聞いた相手が養父吉五郎であるとする明らかな記述は、新社版以降除外され、単に「人

から又聞き」となっている。

史実の槍突きと綺堂の「槍突き」

「槍突き」が、文化三年、文政八年の実際に起こった事件を下敷きにして、先行研究でも触れられている。浅子逸男は、『街談文々集要』「暗夜突盲人」における、「文化三丙寅正月末より、夜分往来の盲人・乞食・ゑざりの類を槍にて突殺す事あり」の記述をはじめ、『増訂武江年表』の喜多村篤庭によって増補された箇所、及び『きゝのまに〜』においても、同事件が記されていることを指摘している。⁽⁴⁾『街談文々集要』にはこのときに詠まれた落首が三首記載されており、はじめの二首が「槍突き」で半七老人が語る「春の夜の闇はあぶなし槍梅の、わきこそ見えね人は突かるる」「月よしと云えど月には突かぬなり、やみとは云えどやまぬ槍沙汰」と一致する。⁽⁵⁾また文政八年の清元延寿太夫の暗殺に関しては、『増訂武江年表』に盗賊と延寿齋の死が並記されており、『きゝのまに〜』でも延寿齋が乗物町河岸で突き殺され、この頃類発していた槍突きによるものかと推測されている。「槍突き」と対照させると、文化三年の事件は時期、落首共に『街談文々集要』の記事が近く、この事件をまくらにして『増訂武江年表』『きゝのまに〜』にみられる文政八年の事件を本筋において描いている、と述べている。

文化三年の事件は前掲三資料のほか、『藤岡屋日記』『我衣』『兎園小説』などにも記録がある。特に『兎園小説』の「突くといふ沙汰」

には、文化三年の事件と「槍突き」で半七老人が語る落首二首、及び延寿齋が乗物町で暗殺された事件が合わせて記述されている。⁽⁶⁾したがって管見の限りでは、「槍突き」は『兎園小説』の記述が最も近く、主にこの「突くといふ沙汰」を題材にしていると推察できる。このことを踏まえて『兎園小説』の記述を中心とした実際の事件と、綺堂の「槍突き」との相違点を探っていく。

まず一点目に、被害者設定が異なる。前掲のとおり、史実では盲人の按摩や乞食のいざりといった身体障害者が槍突きの標的となっているが、「槍突き」では基本的に無差別、具体的に狙われたのは清元延寿太夫と女装した俊之助、そして七兵衛である。作兵衛兄弟の犯行動機が小綺麗な江戸の民への嫉妬と考えると、一般市民もしくは着飾った人間が対象となるのは頷ける。

二点目には、犯人設定が挙げられる。これは綺堂の「槍突き」における最も独創性の強い項目といえよう。文化三年の犯人は、史実では武家屋敷に奉公もしたことがある男で、同年四月に召し捕られ処罰されているが、「槍突き」における犯人作右衛門は甲州の山奥に住む獵師で、捕まることなく故郷へ帰り、何食わぬ顔で暮らした後に、雪に滑って谷底へ転落死している。召し捕られていないのは、彼を後に起こる文政八年の槍突き犯の兄としたためであろう。作右衛門には、故郷に帰り弟に顛末を語り聞かせて、二十年後に弟が自分と同じ犯罪を犯す動機を与えるという物語上の役割があったのである。文政八年の事件に関しては、史実では清元延寿太夫暗殺の犯人は不

明とされている。清元延寿太夫殺害を含む文政八年の事件が、文化三年の犯人の弟によるもので、兄弟揃って同じ動機というのも「槍突き」独自の設定である。

三点目は、清元延寿太夫の死亡の経緯である。『兎園小説』では、槍に突かれたのちに駕籠に乗り息絶えたところがあるが、「槍突き」では駕籠の中で突かれている。『兎園小説』の状況自体謎めいており、駕籠の中で突かれる方が自然であるという理由も充分考えられる。しかしそれ以前に、俊之助の悪戯が駕籠ごと突かれるような状況でなければ成り立たず、その設定に合わせたと考えればより納得がいくだろう。

四日目としては、槍突き事件の模倣犯の描かれ方が挙げられる。『街談文々集要』に、犯人が召し捕られた後、「もはやかゝる悪者ハあるまじと、世間一同に思ひたるに、其廿三日の夜浅草御蔵前西福寺門前にて、又々突れたる者あり」とあるように、史実では文化三年の槍突きを模倣した犯罪が、最初の犯人が召し捕られた直後に次々と起こる。これに対し、「槍突き」では文化三年の事件の後、文政八年に至るまでは同様の犯罪が行われたという記述はない。『半七捕物帳』は、便乗犯罪の犯人に助力を得たり情報を引き出したりして本事件を解決に導くという手法を、他の話でも用いている。例えば「半鐘の怪」では、真夜中に半鐘が鳴らされ人が襲われる本事件に紛れて、元来事件とは関わりがなかった男が、無実の罪で呵責された弟の仕返しに人を襲う。このとき半七は兄を見逃してやる代わりに、弟に

本事件の真犯人である猿の捕獲を手伝わせ、見事騒動を落着させている。「槍突き」においても、長三郎という職人が作兵衛の犯罪を模倣しており、彼から引き出した情報によって七兵衛は真犯人である作兵衛に辿り着いている。また、文化三年の槍突きの模倣犯が文政八年の作兵衛であると捉えれば、これは二重の構造を成しているという見方もできる。作右衛門の事件に便乗した作兵衛を召し捕ったことによつて、解らず仕舞いになっていた文化三年の犯人を特定することが可能となった。結果、作右衛門は故郷で既に死亡していることが判明し、一連の槍突き事件は解決するのである。このように綺堂は、犯人に帰結する手掛かりとして、便乗犯罪を機能させている。

以上みてきたように、綺堂は史実の事件を下敷きとしながらも、犯人を獺師の兄弟とし、犯行動悸を江戸の民への嫉妬とし、記録上直接的な関係性はみられない二つの出来事を、模倣犯罪という形式で関連づけ、獺師の兄弟がもたらした凄惨な事件として捕物帳に仕立て上げた。「槍突き」の独自の部分はほぼこの獺師の兄弟に集約されているともいえよう。それでは何故、綺堂はこのような犯人像を作り上げたのだろうか。次節では獺師兄弟の人物像を考察していく。

獺師とサンカから作り出された犯人像

年は三十七八で、若いときに甲州の山奥で熊と闘って啖い切られたというので、左の耳がなかったそうです。頬にも大きい疵

のあとがあつて、口のまわりにも歪ゆがんだ引つ吊りがあつて、人相のよくない髭ひげだらけの醜男みにくおとこだつたといふことです

これは半七老人が語る、見るからに野蛮人といつた作兵衛の風貌である。この兄弟は親代々の猟師で、甲州の丹波山よりもつと奥地に住み、甲府の町すらも見たことのない人間だつたといふ。こうした描写、特に熊との戦闘などから連想されるのはマタギである。マタギは東北地方の山間に住む猟師で、山中で獣を捕り収獲物を平地人とやりとりしている。⁽¹⁰⁾ 猟師兄弟の出身は甲州だが、「なにか商売の獣物けものものを売ること就いて」江戸へ出てきており、特に作兵衛は「長三郎の近所の獣肉屋けものにくやへときどきに猿や狼を売りにくる甲州辺の猟師」として生活していた。また、江戸期の猟師についての記述として、松平定信の「関の秋風」に以下のような一文がある。⁽¹¹⁾

遠山猿平といへるは猿様の事のみ預る職なり。顔の猿に似たりければ。かく名を云たり。ある頃しる人のかれが宿へ行しに。遠山は鹿の皮はぎながら。其肉を手ぐひにして口も血に満ちたり。妻を呼て。うつはものもち来れと云て。もち来るを見れば。猿のかしら犬の手足多く有たり。鬼の栖ともいふべしやと人語りし。

このような山奥の野蛮人の描写は、まさに作兵衛の風貌と合致す

る。後にも触れるが、江戸期の知識人から見た猟師観にこういふ要素があることを押さえておきたい。

しかしその一方で作兵衛兄弟は、普通の人と変わらないきはきした口の利き方をしていたり、馬鹿にしてかかると皆あべこべに巻き上げられるほど博奕が上手いといつた側面もある。風貌とは裏腹に、江戸の庶民と同等ないしはそれを上回る知性を持ち、強運に守られていた。江戸の町で三度の飯をどどこおりなく食つて、木賃宿に泊まるだけの生活費は、小博奕で稼いでいたのである。兄弟二人して殺人を犯してからも一度は逃げ延びていることから、ある種の巧妙さも伺える。ここから連想されるのはサンカである。サンカの定義は難しいが、定住せずに山奥や河原などに小屋がけなどをして、竹細工や狩猟、あるいは昼間乞食などをして夜間窃盗を働くといつた生活を送る人々のことを指す。⁽¹²⁾ 柳田国男によれば、サンカの中には「神佛の靈験に假托して詐偽を為」したり、「有りさうなる不幸話をして人の惠與を詐取」したりして生活する者が多く、「人里に近くして而も人の視察を避くる手段最も周到」であり、「東京の西郊二三里の内にも多分サンカならんかと思はる、漂泊者の小屋掛あるなれど、警察官すら其出入を詳にせざるが如し」とされている。⁽¹³⁾ 一方で「河川の改修及人家の増加により追々小屋掛の適地を失ひ、是非なく市中に入りて安宿等を根拠とする者多く」ともあり、これは「楯突き」で江戸へ出てきた作兵衛が「花町辺の木賃宿はなまちのきちんやどに泊まつている」こととも一致する。

また、猟師兄弟の凶器に注目してみると、彼らは犯行の度に竹藪から竹槍を作って人を突いている。そして作中における犯行現場は、和国橋の際、柳原の堤、横網の河岸、両国橋の橋番小屋という河川付近である。一方サンカは、「彼等の最も好むは川の岸なり。(中略)川除地には竹藪多くして密陰を為し小屋掛の手数少なき上に、無代にて手工品の原料を得るの便もあればならん。」とあるように、竹藪の多い河川付近を活動エリアの一つとしているのである。

このように、おそらく作兵衛兄弟の人物像は、猟師とサンカの混交から成り立っていると考えられる。綺堂が柳田国男の著書を参照していたかどうかは定かではない。しかし、このような人別帳に名前の載らない、ある種得体の知れない連中が江戸を出入りしていたことは想像するに容易い。そしてこれらが江戸の人間に混同されて認識されていた可能性も高い。猟師もサンカも、その主な生活区域は、江戸という都市の外側である。綺堂は「槍突き」事件を、江戸のソトからもたらされた脅威として描いたのである。

ソトからやって来る脅威への信仰と排斥

網野善彦は『無縁・公界・業』において、「遊女と遊郭、博奕打と賭場、河原者といわれた役者と芝居小屋、そして「えた・非人」と被差別部落、さらに宿場以外には落着く場所すらもたまさままな漂泊民」といった人々と彼らの生活の場との関係について、「牢獄」としての側面と「逆転し、裏返された「自由」が存在した」という側面を指摘している。

戸籍を持たず、政府による管理体制のソトにあった人々は、管理者である政府と戸籍を持つ「有縁」の人々に対し「無縁」という力を持っていた。「無縁」の人々は「有縁」のルールとは異なる境界線の向こうに生活しており、「有縁」社会の力が及ばない点で脅威となり得るのである。

江戸に住む人々の理解の及ばないものへの恐怖、これは江戸を描き出す『半七捕物帳』という作品の、大きなテーマの一つである。例えばそれは闇夜であったり、妖怪の類であったりする。これらの要素は「槍突き」にもみられる。七兵衛が最初に柳原の堤で俊之助に出逢う場面では、槍突きの噂に怯えて人通りが途絶え、闇夜に支配された寂しく恐ろしいな堤と、幽霊のような俊之助の描写が怪談の雰囲気醸している。俊之助が女装を見破られぬよう七兵衛の突きつけた提灯の明かりを嫌がるのも、この場面では光を嫌う妖怪のように描写される。彼の一撃によって、七兵衛が十夜講のために持参した数珠の緒が切れてしまう場面などは、妖怪の攻撃により神仏による守護が打ち破られる状況を思わせる。しかし化け猫の噂という怪談の要素は、「槍突き」においては専ら俊之助が担っており、槍突きを行う犯人が化け猫であるというような噂は一切立っていない。このことは、事件を怪談に錯覚させる手法が多く用いられる『半七捕物帳』では珍しい。猟師兄弟は専ら、ソトから脅威をもたらすという役割に徹している。

生まれて初めて繁華な江戸の町をみて、はじめはただ驚き、ぼん

やりして、そのうちに嫉妬や羨望がむやみな憎悪へ転じ、無差別な殺意を抱くようになった。半七老人は作兵衛兄弟の動機をこのように語っている。子供や女が熱に浮かされたようになって、あるいは山小屋で発狂して山奥に入っていくという逸話はあちこちにある。これを裏返しすると、山という境界を越えて江戸に入ってきた獵師が発狂するという、一見類似した事態が想定できる。しかしこの獵師、「吟味になってからも、口の利き方などはきはきしていて、普通の人と変らなかつた」とあるように、精神に異常をきたしてはいないのである。更に前述の動機は作兵衛の自白であり、加えて半七は「人から又聞きなんですから、いくらか間違いがあるかも知れませんが」と冒頭で断りを入れている。この動機は果たしてどこまでが真実だろうか。

江戸のソトからやってくる脅威に対して、江戸の人々はそのように向き合ったのか。彼らへの反応がポジティブな方向に働く場合、人々は崇拜し信仰する。逆にネガティブな方向に働く場合、畏怖し排斥する。これらは表裏一体である。『半七捕物帳』はしばしば、江戸のソトからやってくる脅威を題材にする。例えば「女行者」において、冷泉院為清郷の息女を名乗る行者が現れ、多数の人々の信仰を集めている。ある種の「まれびと神」として、ソトの人間が神格化されているのである。これはポジティブな方向に働いた場合の一例である。一方で「槍突き」は真逆である。

実に乱暴な奴らで、兄弟揃ってそんな人間が出来たというのは、殺生ころしよの報いだろうなんて、その頃の人達は専ら評判していたさうですが、どんなものですかね。何かそういう気がいじみた血筋を引いているのか、それともふだんから熊や狼を相手にしているのか、自然にそんな殺伐な人間になったのか。さびしい山奥から急に華やかな江戸のまん中へほうり出されたもので、なんだか気がおかしくなったのか。今の世の中でしたら、いろいろの学者たちがよく説明してくれたんでしょうけれど、その時代のことですから、大抵の人は殺生の報いだとか因果だとか、すぐにきめてしまったようです。

これが江戸の人々の、ソトの人間に対するネガティブな反応である。前掲の『関の秋風』は江戸の知識人層から見た獵師観であるが、まさに作兵衛兄弟への偏見の目と合致している。恐らく現代人なら感じるであろう「槍突き」読了後の後味の悪さは、こうした人々の抱える心の闇、異端に対する畏怖が生み出す差別感から来ているのではないかと考えられる。作兵衛兄弟の真意は最後まで解らない。半七も、そして綺堂も、江戸のソトの人間の立場からこの物語を語ることは決していない。彼らもまた、このような差別感に根底から浸かってしまっているウチの人間なのである。あくまで江戸のウチに住まう人々の視線で語られる「槍突き」は、理解の及ばない存在への差別感という、江戸という都市が抱いていた闇の本質をリアルに

描き出していると言えよう。

以上、「槍突き」を通して、綺堂が描き出そうとした江戸の闇の中に、ソトからもたらされる脅威という要素を見出すことができた。『半七捕物帳』という江戸の姿を描き出す作品において、ソトからやってくる存在はネガティブな側面を強調して描かれることが多いようである。しかし彼らには「まれびと神」のような側面もある。『半七捕物帳』を読むにあたり、ネガティブなものとして描かれたソトの存在を、描かれなかつたポジティブな要素も想起しながら鑑賞したとき、より深みのある江戸庶民像を感じることができのではないだろうか。

注

- (1) 『半七聞書帳』（隆文館、大正十一年六月）
- (2) 『半七捕物帳 第四集』（新作社、大正十三年五月）
- (3) 「暗夜突盲人」（『近世庶民生活史料街談文々集要』三二書房、平成五年十一月）
- (4) 浅子逸男『半七捕物帳』覚え書（『昭和文学研究』三十巻、平成七年二月）
- (5) 前掲「暗夜突盲人」
- (6) 滝沢馬琴・武田信英「突くといふ沙汰」（『日本随筆大成第二期 一巻、兎園小説・草盧漫筆』吉川弘文館、昭和三年七月）

- (7) 前掲「暗夜突盲人」
- (8) 前掲「突くといふ沙汰」
- (9) 前掲「暗夜突盲人」
- (10) 柳田国男「山の人生」（『定本柳田国男集第四巻』筑摩書房、昭和四十三年九月）。初出は『アサヒグラフ』四巻二号〜五巻七号（大正十四年一月〜八月）
- (11) 松平定信「関の秋風」（『翁草 四巻』歴史図書社、昭和四十五年十一月）
- (12) 『日本国語大辞典第二版 第六巻』（小学館、平成一三年五月）
- (13) 柳田国男「イタカ」及び「サンカ」（『定本柳田国男集第四巻』筑摩書房、昭和四十三年九月）。初出は『人類学雑誌』二十七巻六号、八号、二十八巻二号（明治四十四年九月、十一月、明治四十五年二月）
- (14) 前掲「イタカ」及び「サンカ」
- (15) 網野善彦「江戸時代の縁切寺」（『増補無縁・公界・楽—日本中の自由と平和—』平凡社、昭和五十三年六月）

参考文献

- 滝沢馬琴・武田信英『日本随筆大成第二期一巻、兎園小説・草盧漫筆』吉川弘文館、昭和三年七月
- 石塚豊芥子編・鈴木棠三校訂『近世庶民生活史料街談文々集要』三一書房、平成五年十一月

森銃三・鈴木棠三・朝倉治彦編『日本庶民生活史料集成第十五卷

都市風俗』三一書房、昭和四十六年八月

須藤由蔵『近世庶民生活史料藤岡屋日記』三一書房、昭和六十二年

～平成七年

神沢貞幹『翁草 四卷』歴史図書社、昭和四十五年十一月

柳田国男『定本柳田国男集第四卷』筑摩書房、昭和四十三年九月

網野善彦『増補無縁・公界・楽―日本中世の自由と平和―』平凡社、

昭和五十三年六月

「蝶合戦」小考

鄭 智 恵

世界における半七捕物帳

『半七捕物帳』は日本での人気はもちろん、アメリカ、フランス、韓国などで、一部が翻訳されて紹介されるほど、有名な小説だ。フランス語版は現代日本文学の翻訳・普及事業(JLPP)によって、『*Fantômes et samourais : Hanshichi mène l'enquête à Edo* (幽霊と武士：江戸の半七の事件)⁽¹⁾』というタイトルで、英語版(アメリカ)⁽²⁾、『*The curious casebook of Inspector Hanshichi : detective stories of old Edo* (刑事半七の不思議な事件簿：昔の江戸の探偵物語)⁽³⁾』というタイトルで発売された。韓国では、現在、韓国で大人気の宮部みゆきなどの現代日本の小説家たちが絶賛したという宣伝で、『한시치체포록(半七の逮捕録)⁽³⁾』というタイトルで発売された。

以上の三冊の翻訳本は完訳本ではなく、一部のエピソードが翻訳されて紹介された。これは『半七捕物帳』が考証に優れ、日本の独特な文化の色が強いため、他の文化圏の人にとっては、特に日本の事情に詳しい人でない限り、そのエピソードが無駄の飾りのように見えてしまうということだと見られる。特に『半七捕物帳』を読む時は、地名や事件など、近代以前の日本の様々な知識を持っていないければ、作家である岡本綺堂が作品のあちこちに置いた、笑いのポ

イントの楽しさを感じることが難しいので、それぞれの国で、興味を引き出し易い素材や、理解し易いエピソードだけを抜粋して翻訳したからだと考えられる。

例えば、本稿のテーマである「蝶合戦」にもこんな部分がある。

「まずそうらしいな。お国はゆうべから帰らねえというが、おそらく来年の盆までは娑婆へ帰っちゃあ来ねえだろうよ」と、半七はにが笑いをした。

お国は死んだので、死者の魂が、お盆に帰ってくる信じている日本人には小さな楽しみを与えることができる部分である。しかし、お盆という仏教界の慣わしを持っている国の人でなければ、半七が笑うときに一緒に笑うことができないだろう。翻訳作品の読者は、その分野の専門家ではなく、その翻訳された言語を使用する一般の読者である。翻訳家が注を付けて説明をしても、読者が注を見て一歩遅れて理解をするときには、すでにその味が一段落ちているだろう。

書誌、異同

「蝶合戦」は大正十四年四月発行の『講談倶楽部十五巻四号』に初めて掲載された作品で、初出には「江戸探偵物語」というサブタイトルがついている。雑誌に掲載された形式であるため、作品冒頭に

「又しても半七老人の昔話をかく。読者の倦怠を来たさなければ幸いである。」という簡単な説明がついている。この説明は、初刊の新作社発行の小説『半七捕物帳』にもついているが、テキストである光文社文庫の新装版には、この説明がついてない。

この他に初出で「それから蝶合戦……。いや、その蝶々合戦について」という表現を使い、この表現は初刊本は残っているがテキストには「それから蝶合戦……。いや、その蝶合戦について」とあり、「々」が残っていないなどの小さな違いがある。その他、時代とともに、日本語の標準表記が変わったため、初出とテキストの間には、一部の漢字とひらがなの表記の違いが見えるが、それ以外の大きな違いは発見されなかった。

梗概

宇都宮に行ってきた半七老人は旅先で見た雀合戦の話をきっかけに、江戸で起きた蝶合戦に関する捕り物の話をする。

万延元年六月末ごろ、本所に突然白い蝶の群れが現れ、大災害の前兆として奇妙なことが起こるだろうと予言していた尼が脚光を浴びることになる。弁天様を祀る尼の善昌は、しばしば自分の夢に出てくる弁天のお告げを人々に知らせて、災厄を避けさせると評判の女で、彼が祀る弁天様は靈験で有名だった。

彼が弁天様を祀るようになったのは六、七年前からで、その弁天様が有名になったきっかけは、二、三年前、賽銭を盗みに入った泥

棒が仏前にそなえたお餅やお菓子を食べ仏罰で死んだ事件で、これにより善昌と彼が祀る光明弃天の名が知られるようになった。

白い蝶の群れが大災害の前兆と思った人々は、だれもが善昌の光明弃天堂に駆けつけて祈りを上げる。これで善昌の弃天堂はさらに有名になる。

弃天堂の盂蘭盆前の十五日間の祈りの期間中、善昌は突然弃天像を紫の布で覆い隠し、人々は善昌が弃天像を紛失したのではないかと疑うことになる。善昌の言葉によると、浅草観音のように隠して百日が過ぎると、人々の災厄が消えると言うが、人々はその言葉を信じない。

やがて十五日間の祈りが終わり、人々は弃天堂の裏口の近くの台所の床の下から善昌と思われる死骸を発見するが、この遺体は首が切られていた。

本所の岡つ引きの朝五郎が留守のため、半七が呼び出され、部下である熊蔵と一緒に捜査をする。現場を見回して死骸と弃天像を見つけた半七は、善昌の信者である伊助などから得た情報や長年の経験から身に付けた知恵で、事件のあらましを見抜いた。半七の予想通り隠れていた善昌を見つけ、それに関する裏話も知ることになる。

二、三年前仏罰で死んだ泥棒は善昌の死んだ夫の弟、与次郎で、彼は今後も引き続きお金を強請る心つもりで善昌に近づいた。そのような与次郎を処理するために善昌は仲良しのお国と相談して、芝居をして与次郎を殺してしまった。与次郎の件が解決後、お国と善

昌はもっと親しくなったようだ。お国は善昌に遊び仲間として普在寺の覚光を紹介した。ここで三角関係が始まった。善昌より年をとり、お金もない不利な立場だったお国は、与次郎の件で善昌を脅迫して、覚光と別れることを強要したが、善昌は覚光と別れることができな

い。
お国は善昌を困らせるために、盂蘭盆の祈りの期間中に光明弃天像を盗み出す。祈りの最後の日、弃天像を返してもらった善昌はお国との和解の酒の席で、酔ったお国を殺し、自分の服を着せて、まるで善昌が強盗に遭い、死んだようにした後、覚光がいる普在寺に逃げる。

隠してくれという善昌を拒否したら自分の悪行もバレると思った覚光は一応善昌を受け入れ、善昌が持つて来たお国の首も墓地の隅に埋めておいた。結局すべてを見抜いた半七が善昌と覚光を逮捕し、二人は罰を受けることになる。

事件解決後、善昌の弃天堂は取り壊されるようになり、弃天様は川に流すことに決定された。川に流される弃天様に白い蛇が現れ巻き付いたと、その蛇は善昌の魂ではないかという噂が流れた。

蝶合戦は実在したのか

『武江年表』によると万延元年六月頃、「同晦日、本所野川通に数万の白蝶むらがりきり、水面とに浮かび或るひは舞ふ、あたかも雪の如し。その内五ツ目の辺、最も甚だしかりしとぞ」となっている

ので、実在したことに間違いない。これを江戸のことをよく知った岡本綺堂が小説に入れたと思われる。

「雀合戦、蛙合戦、江戸時代にはよくあったものです。この頃そんな噂の絶えたのは、雀や蛙がだんだんに減って来たせいでしょう。あいつらも大勢いると、自然縄張り争いか何かで仲間喧嘩をするようになるのかも知れません。人間と同じことでしょうよ。ははははは」

半七老人の言ったとおり、群がる蝶々などは、東京では時代とともに去ってしまったと思われるが、中国や南米などの、自然が昔のまま残っているところでは、まだ蝶の群れを見ることが出来る。これは近代まで生きた岡本綺堂が江戸に抱くノスタルジイの一つではないかと思う。

蝶の合戦、蝶の戦いという言葉を通じて初めて接した稿者は、蝶合戦という単語を韓国語に翻訳をした場合、蝶合戦をどんな単語に置き換えれば、稿者自身、あるいは、この作品を読む韓国人が理解しやすいかを考えてみた。合戦を韓国語に翻訳すると外音(戦い)、전투(戦闘)などの表現になり、和英辞書をひいたらBattleという単語が出てきた。

『平七捕物帳』の本文にも戦うようだという表現があるが、実際に戦うとは書かれていない。秋にイナゴの群れが急増するときは、お

互いを食べるといふ話があつて、交尾が終わったカマキリのメスがオスを食うといふ話も聞いたことがあるが、決まった果汁や、特定の蜜を吸う蝶がお互いを食べたり、戦いをするといふことにならぬのも常識外のことなので、나미외음(蝶の戦い)ではなく、나미뽀(蝶の群れ)に翻訳する方が分かりやすいだろう。

また、雀合戦に一番近い、鳥の群れに関する単語として가장오리(最早(アヒルの群舞)といふものがあり、この韓国語の単語もアヒルの戦いではなく、群れをなして踊るといふ表現に当たる。

世界的に蝶はいろいろな形でシンボル化されてきた。欧米やアジアの説話などで登場する蝶は人の魂の象徴になっている。アジアで一番有名な蝶の話は莊周之夢である。夢の中で蝶になった莊周は目覚めてから莊周が蝶の夢を見たのか、蝶が莊周の夢を見るのかを悩む。この話のなかでは人と蝶が対等な立場でいる。ギリシャ神話に出るエロスの妻、プシケの名は魂、心、蝶などの意味を持つ古代ギリシャ語の単語でもある。⁶⁾

なぜ白い蝶なのか

花を女性にほのめかし、その女性に訪れる男性を華やかな色の蝶といふ場合もあるが、アジアで白い蝶は死、または悔いを残した魂などのイメージがある。韓国の南の地方に残っている「アラン伝説」では、殺されたアランという女性が国の司に白い蝶になって犯人の帽子に座るから、犯人に罰を与えてください。といふ願いをする。⁷⁾

中国では「梁山伯と祝英台」という叶わない恋の最後に二人とも蝶になる主人公の話がある。韓国の民間信仰の中では、陰暦の三月三日に野原に出て、その年の運試しをするものもある。老人同士の中で最初に白い蝶を見た人は年が ажける前に死ぬという話もある。日本にも「蝶魂」パターンの話が数多く残っている。寝ている人の鼻から蝶やアブ、小さいねずみが出て、家の外を見て戻って鼻に戻ると、蝶などが見たものを夢だと認識するという話である。蝶は卵—幼虫—さなぎ—成虫という完全変態を行う。さなぎの時はまるで死んだみたいだが、脱皮して、美しい蝶になるので、死からのよみがえりを意味するようになったのだろう。

なぜ「蝶合戦」に登場する江戸の人々は白い蝶に驚いたのか。稿者が持つ白のイメージは英語の単語「white」そのもので、幅広く考えて見ても薄い灰色から薄い茶色までと考えられる。稿者の母国である韓国では喪服の色や寿衣の色が、白、又は薄い黄色である。欧米風の葬式をする家でも、黒い服を身にまとった女性は髪に白いリボンをつける風習がある。どちらかと言うと白は死や宗教的なイメージになってしまふ。ここで古い時代の日本人はどう思ったのか、疑問が生じる。日本人が白をどう思うのか、前田雨城の「色」の中で、こう表現されていた。

「しろ」は神秘的なものの表現で、色彩名といつても色相をもつているものとはいい難い。ところで、同じく「しろ」いう名称

をもちいていても、漢字にあてはめる時に「素」の字を用いているところの「しろ」がある。これは、いずれ後章でふられることにはなるが、自然そのままの色を「しろ」と示しているので、この場合には「淡い黄色」から「濃い茶色」また「ホワイト」を示す時もある。ともあれ「しろ」は、自然を含めて神秘性をもつもの、また怪異現象と当時の人が考えた時の表現と見るこ
とができるであろう。

白を神秘的な色だと思つた江戸の人々が見た白い蝶々は、ただの怪異現象ではなく、弃天様のお告げを伝えるために現れた、神の使いに間違いない。

この「蝶合戦」に登場する蝶はどんな役割をつとめているのか。「蝶合戦」は万延元年にあつた自然現象の一つとして、旨くストーリーリーにとりいれただけなのか。同じ「半七捕物帳」に蝶が出てくる話がある。「白蝶怪」での白い蝶は役目がはっきりしていて、白い蝶が現れた家の人は死ぬという、怪談としての役割をもっている。「蝶合戦」の蝶はどうか。半七老人が最後に言つたとおり、ただの偶然なのか。偶然、出鱈目の予言をする善昌に金儲けのチャンスを与える装置としての役割しかはたさないかと思つたら、作り話の味は落ちてしまふだろう。

善昌の予言とは？

偶然であるにせよ、江戸の人々にとっては、蝶の群れは善昌の予言とも関連があるように見えた。この蝶の群れは善昌の予言にふさわしい、大災害の前兆の役割をすることで、善昌の主張に信憑性を与えて、人々が彼の光明弁天堂に行つて護摩料や祈祷料を出させるきっかけになる。

「そこで、問題の蝶合戦ですが、善昌も覚光という相手が出来て、それに入れ揚げる金が必要なので、なにか金儲けの種をこしらえようと思つてるところへ、井伊大老の桜田事件などが出来し、世間がなんだかざわ付いているので、そこへ付け込んで今年もまた大騒動があるなどと触れ散らかし、祈祷料でも巻きあげる算段をしていると、丁度かの蝶合戦があつたので、お有難連はすっかり煙にまかれて、これはきつと何かの前兆だということになつたので、善昌は万事思う壺にはまつて内心大喜びでいると、それがお国には面白くない。善昌が金儲けをすれば、きつと覚光のところへ運んで行くだろうと思うと、いよいよ妬けて堪まらないので、本尊の木像をかつぎ出すやら、坊主と手を切れと責めるやら、大騒ぎをやつた挙げ句の果てが、更にこんな大騒ぎを仕出かしてしまつたんです」

善昌が弁天様のお告げを詐称した時は江戸末期、近代の直前の数

年間だつた。万延の時代的背景を見ると、日本を囲んでいる世界が急激に変わつていた。外国の軍艦が日本の海岸に出没する、アジア第一の国であつた中国が戦争に負け、領土を割譲する、東南アジアの国々が植民地に転落している。日本の中でも変化が起こつていた。意見があわなない相手は殺し合い、大地震や台風、飢饉である時期であつた。頼る対象をさがす人間は増え続けていた。

こんな時代に必ず出現するのが新たな神である。この新しい神の裏にはお金の問題がからんでいる。簡単に神を作つて金儲けに使う人がいるからだ。この話の善昌も人々の神頼みを利用するぐらゐの悪知恵の働く女である。怪談、または幻想がどれほど怖くても、現実の欲望だらけの人間には勝つことができない。

善昌たちには悪事に利用できる偶然に違いないが、頼るところのなかつた江戸の人々には、弁天様の使いに見えたはずの白い蝶の群。しかしいきなり群がって現れた白い蝶々は、ゴルドラッシュの時代のカリフォルニアに集まつた人々のようにもみえる。サッターの採鉱所での金の発見は一八四九年、善昌たちの事件からはほんの十二年前である。世界規模で、人間が移動する時代が到来しつゝあつたわけだが、江戸もその渦中にあつた。白い蝶の乱舞は、過去を隠すため、又は金儲けのチャンスのために江戸に入った善昌や与次郎らの他国から江戸へ集まる人々で、いきなり人口が増えた江戸、そのもののように見えるだろう。乱舞する白い蝶が川に落ちて流れてしまふのは、まるでその時代の流れに翻弄される江戸の庶民の姿に重なる。

注

「あま酒売」小考

本田逸朗

- (1) Okamoto Kido; Chesneau, Karine. *Fantômes et samourais: Hanshichi mène l'enquête à Edo*. France: Picquier Poche, 2007
- (2) Okamoto Kido; MacDonald, Ian. *The curious casebook of Inspector Hanshichi: detective stories of old Edo*. USA: University of Hawaii Press, 2007
- (3) Okamoto Kido; Choo Jina. *おんたけしと新助*. Republic of Korea: Cheaksang, 2010
- (4) 『半七捕物帳』のアメリカ版である『The curious casebook of Inspector Hanshichi: detective stories of old Edo』には、昔の江戸の地名の地図絵がある。
- (5) 斎藤月岑・今井金吾『定本武江年表』(ちくま学芸文庫、平成十五年十月)
- (6) The New Encyclopædia Britannica. USA: Encyclopædia Britannica, Inc., 1993
- (7) 韓國精神文化研究院 韓國口碑文學大系 Republic of Korea: 韓國精神文化研究院, 1980~1992
- (8) 前田雨城『色』(法政大学出版局、昭和五十五年四月)

参考文献

- 今内孜『半七捕物帳辞典』国書刊行会 平成二十二年一月
 浅子逸男『音菊半七捕物帳―江戸の残党』『日本文学』平成十七年十月

「あま酒売」は安政四年(一八五七)三月末、半七三十五歳、二十五番目の事件である。事件の梗概は次の通り。

安政四年の正月から三月にかけて、逢魔が時の刻限から一人の老婆が甘酒を売って歩くようになった。その老婆に近付いた者の中に奇怪な病に見舞われる者が多く出始め、酷い者は死に至った。その症状から老婆は蛇の化身であり、なにかの意味で或る男や或る女を魅こむに相違ないと話が決まり、尾鱈が付いて広まると役人も放っておけなくなった。そのうちに半七にも声がかかり、自分の善八と幸次郎とを引き連れて捜査を開始する。河内屋の奉公人のお熊と出入りの小間物屋の徳三郎に眼を付けて調べていたところ、半七達は偶然に噂の老婆を発見して後を尾ける。しかしその途中、老婆は突然に二人の武士に斬殺されてしまう。半七は武士達を自身番へ連れて行って尋問をしていると、徳三郎がお熊を殺害したとの報告もたらされる。徳三郎を自身番へ連れて来て尋問したところ、以下の様に述べ始めた。旅あきないで九州まで下った時、小さな村で母親のお綱と二人暮らしをしていたお熊と知り合った。その折に奇病に病みつき、回復した後に、お熊達蛇神の血統の者が持つ一種の魔力のせいだと知った。お熊を捨てて逃げようとするがお熊はどうして

も離れない。結局は諦めてお熊を連れて江戸まで逃げる。しばらくは平穏な生活が続いたが、お綱は娘を取り戻しに江戸まで追つてきて、それが甘酒売りの老婆の噂となっていた。お綱の手が自分達の身辺に伸びるにつれて恐怖し、お熊に母親の元に戻ってもらえないかと説得する。しかしお熊は承知せず、逆上し短刀を奪って自殺した。そう語り終えたところで武士達も話し始める。武士達とお熊達は同国の者で、甘酒売りの噂の老婆は自分達の藩の者だと江戸屋敷では鑑定していた。これが明るみになっては屋敷の外間にも関わる事なので見付け次第に討ち果たせとの命令を帯びていたので、お綱を斬つたということである。これで事件は落着し、その事情ゆえ内分に済まされる事になった。徳三郎は江戸払いになったが、江戸を離れる旅の途中、神奈川で大熱を発して藻掻き死にしまったという。

初出は『文芸倶楽部』大正九年五月号。当初「半七聞書帳」後編の二「甘酒売」として発表された。初出では文政元年（一八一八）の事件で、本所の伊兵衛という人物が半七の位置に据えられている。二度目の刊行である新出版社版全集で半七の担当する事件に改作。事件の起きた年も文久二年（一八六二）に変更され、手下の名前も小吉と倉蔵から善八と幸次郎に改められている。伊兵衛と倉蔵が小料理屋で雷雨を避けている時、改変前の主人公伊兵衛が酒を飲む描写があるが、半七は酒を飲んでいない。また、物語冒頭、怪談をせがむ「私」と「津の国屋」の事件を引き合いに出しながら語りだす半七老人の会話が追加。更に、お熊は初出では利八の科白で豊後の国

の者とはっきりと言われるが、西国生まれと言われるにとどまる。三度目の刊行である春陽堂版全集刊行時は、前述の通りの安政四年（一八五七）の事件に書き換えられ、徳三郎が九州で滞在した町が、日向に近い某城下の町から、ある城下の町へと変更されている。本考では徳三郎・お熊・お綱の三者の関係から見る話の形に焦点を当てて考察したい。

蛇婦譚として

『半七捕物帳事典』において『武江年表』文政元年の項に「三月の頃、市中へ醴ちひを售うふ老嫗出るよし、これに触るれば疫を病むという妖言行はる」とあると記載されている。また、浅子逸男氏は喜多村筠庭「き、のまに〜」の記事を引いて、「初出の「甘酒売」は「き、のまに〜」のとおり年代設定だったわけであり、綺堂はいわば都市伝説をまくらに使って『半七捕物帳』の世界を構築したのである」としている。氏が引用した記事は次の通りである。

又云、京に四月始より、上下の家ニ上酒有といふ三字、紙に書て、門戸に押はるは、此頃怪敷うば酒賣にありく、その者門に至りても家内疫を承との事也、をりしも江戸の太田博士、都にのぼりて、をる所の門に押たるは、有酒如池、有肉如坡、謹謝妖婆、勿過我家、後に聞は難波よりいひ傳へし事にて、難波にては其うば来る家必痘をやむとて、小兒ある家は彼三字を赤紙に書た

りとぞ、江戸には文政元年三月頃、醜をうる老婆ありく、是にあへば疫をやむといへりき。²⁾

この記事は「き、のまに〜」の文政三年(一八二〇)の項に載る。話の起点は「老婆」「甘酒」「病」の三点であり、お熊の存在、蛇神の血筋、といった事柄は「あま酒売」として作品化するにあたって綺室が付け加えた要素である。そこから見えてくるものは何か。

本作で、半七には事件の原因である甘酒売りの老婆¹⁾お綱を捕まえる事が求められた訳であるが、実際には半七が事件の解決に寄する事は殆ど無かったと言つてよい。

甘酒売りの老婆の噂が流れた期間をそのまま事件の発生期間と重ね合わせるならば、事件が起きていたのは安政四年(一八五七)の一月から三月末までの約三ヶ月間。この長期間で半七が捜査を開始したのは事件終息の僅か二日前。初動としては遅いと言える。次に、お綱を発見した事についても偶然によるところが大きい。徳三郎とお熊という、お綱に近しく事情を知る人間に眼を付けるまでではないものの、二人の供述から手掛りの糸を手繰り寄せてお綱の元へと至っている訳ではない。河内屋の前で佇んでいたところにお綱が通りがかったに過ぎない。そしてお綱を尾行するという手段に出たところ、お綱は目の前で武士達に斬殺されてしまう。つまり、事件の原因は武士達によって取り除かれる事になった。同様にして、お熊に対しても捕まえはせずに様子を見るという態度に出た。これが結

果的にお熊の自殺を許す事になったり、引いては徳三郎の死をも招く事になってしまった。捜査を開始した折、半七に声を掛けようとした徳三郎とのすれ違いを含めて、半七は事件の一連の流れに何ら影響を与えてはいない。本作から半七の存在を抜いて考えたとしても事件の運びは変わりはない。お熊を追って江戸へ来たお綱は正月から三月末の間に奇病の犠牲者を出し、偶然にその姿を見つけた武士達によって斬殺され、事件は終息となる。同時にお熊は自殺を果たし、後に徳三郎も死亡する。つまり、半七は事件の全体を見届ける目としての役割しか果たしていない、観察者のな立ち位置に過ぎないのである。

そうして半七を横に置いた本作の眼目は、徳三郎・お熊・お綱の三者の関係と、蛇神の血統の魔力とにある。この二つを考え合わせるならば、「不幸な恋の終着点に「蛇」に化身する女性像を描き、逃げる男に追いつがる女の執念をシンボライズする表現が、古代・中世の説話、絵画から江戸期の小説、芸能におよぶ作品群に様式化され、定型を確立するに至った」³⁾蛇婦譚の流れを汲むものとして本作を位置付ける事が可能なように思う。

右で引用した書籍の中で、堤邦彦氏は蛇婦譚を三つのカテゴリーに分類している。

- ・ 古代アニミズムの神話体系を原郷とする水の精霊の民談
- ・ 中世、仏教唱導の隆盛を背景にした神人化度説話群

・前二項を踏まえた、江戸期の小説、芝居、浮世絵などの表現文
化の中の恋の懊悩や嫉妬に狂う執着のころねを因として蛇身
に変化する女たちの怪異譚

蛇婦譚の内で、男を追う女の話は『道成寺縁起』等に代表される
「安珍・清姫」型の説話が有名である。この型の話は古くから存在す
る。伝承や創作によって細部に違いはあるものの、その内の一つの
概要を『今昔物語集』巻十四第三「紀伊国道成寺僧、写法花救蛇語」
より次に述べる。

熊野に詣でる老若二人の僧は、道中人家に宿を求める。その家の
女主人は若い僧に懸想して夫となるよう誘惑するが、僧は熊野から
の帰りに女の言うことに従うとしてその場を逃れる。しかし、僧は
女を恐れ、帰り道に女の家には寄らずに過ぎる。これを知った女は
部屋に籠もって死んだかと思うと、大蛇となつて僧を追う。それを
噂に聞いた僧は道成寺へと逃げ込み、鐘の中に隠してもらう。だが、
道成寺へ打ち入ってきた大蛇は鐘を取り巻いて中の僧を焼き殺して
しまう。僧の死体は僅かな灰しか残らなかつた。その後、道成寺の
老僧の夢の中に死んだ僧が現われて、自分も蛇の身と化して女の夫
となり苦しみを受けている事を語る。そして法華経を書写して供養
をしてくれるよう訴えて消える。老僧がその通りに供養してやると、
後日、僧と女と二人して夢に現われ、女は忉利天に、僧は都卒天に
生まれ変わったことを告げる。

この説話の語り手は話末で法華経の利益や女性の悪心ゆえに女性
に近づく事を戒めるが、重要なのは話の前半部分、蛇と化した女が
男を追うという構図である。戸板康二氏によると、この説話は江戸
時代に入つても、「語り道成寺」「三國道成寺」「娘道成寺」（京鹿子娘
道成寺）等の歌舞伎の題材に取られた。また、堤邦彦氏によると、
江戸の回向院では清姫の角という物を持ち出して参詣人に拝ませた
事もあつた様である。そしてこれを本作に当てはめてみるとどうな
るか。

本作において蛇婦に比されるのはお熊・お綱の二人である。お熊
もお綱も、先の説話のごとく、その身を直接に蛇と変じることはない。
その代わりに現われるのが蛇神の血統の魔力である。これが発現す
る時、彼女達は蛇と化していると言えると思われる。そして、追わ
れる男は徳三郎とすることが出来る。まず、徳三郎は初めてお熊と
会つた時に、彼女の蛇神の血統の魔力によつて病を受けている。蛇
神の血統の魔力については作中において次の様に説明がなされてい
る。

かれらの眼に強く睨まれると其の相手はたちまち大熱に犯され
る。（中略）それにはかならず、強い感情を伴わなければならな
い。妬む、憎む、怨む、羨む、呪う、慕う、哀む、喜ぶ、恐れる。
そうした喜怒哀楽の強い感情がみなぎつたときに、かれらの眼
のひかりは怖るべき魔力を以つて初めて相手を魅することが出

来るのである。

右の引用文中に挙げられた感情の中に、「慕う」とあるのに注目したい。徳三郎がお熊の魔力によって病を受けたのは初対面の時と、最後に死亡する時であるので、初めて会った時からお熊は徳三郎を強く慕っていたのだと考えることができる。それから二人は互いに別れることなく暮らしていた。当初、徳三郎はお熊から逃げようとはしたものの、「お熊はどうしても離れない。それを無理にふり離そうとすれば、お熊の睨む眼が怖ろしかった」と、結局は情に絆されたので、心底から全力で逃げようとした訳ではないと考えられる。江戸で暮らすようになってからは、経済的な理由で一つ屋根の下にこそいないものの、「二人の愛情はいよいよ濃やかになつていく。距離的には多少離れて、折々の密会という形になつていたものの、心情的には二人の間はいささかも離れることはなかった。この間、お熊の蛇神の血統の魔力は発現していない。半年の間市井に暮らしていて強く感情が揺れることが無かつたというのも不自然に思われるが、「かのおそろしい蛇神も箱根を越せば唯の人間になつてしまつて、なんの不思議を見せることも出来ない」という伝説」も、お綱が江戸でその力を振るつたところから否定されている。先の蛇婦譚に比するならば、徳三郎とお熊は互いに離れていない故に、追い追われする必要がない。つまり、お熊が蛇婦となる前提が存在しない為に蛇神の血統の魔力は発現しないのである。

この状況が変化するのが物語終盤、徳三郎がお熊をお綱の元に返そうとする箇所である。身辺に迫るお綱の手に命の危険を感じた徳三郎はそうすることで安全な形で命を拾おうとする。そのまま事が運んだとすると、距離の上でも心情の上でも二人には大きな隔たりができてしまう。結局はそれを承服しなかつたお熊の自殺により、二人は彼岸と此岸に別たれてしまう事になる。しかし事件後には徳三郎も大熱を発して彼岸の人となつてしまう。お熊が自殺する時「彼女は泣いて泣いて、ものすごいほど狂い立って、いきなり男の短刀を奪い取って、自分の乳の下に深く突き透した」のであるから、徳三郎の死はこの時の激情で発現したお熊の蛇神の血統の魔力によるものと思われる。徳三郎と離れ離れになつてしまつたお熊は蛇と化して徳三郎を追いかけてきて殺し、自分の傍へ引き寄り寄せたのであると見る事ができはしまいか。

次に、もう一人の蛇神の血統であるお綱の方に目を向けるとどうか。お綱が追つてきたのは娘のお熊であるので、男を追う女そのものではないが、その変形と見たい。お熊を追う過程において蛇神の魔力を発揮している、つまり蛇と化しているからである。

怪談

物語冒頭、怪談をせがむ「私」に対して、「商売の方で手がけた事件に怪談というのは少ないものです。いつかお話しした津の国屋だつて、大詰へ行くとかあれです」と半七老人は語る。そして、「あれと

は又、すこし行き方が違いますがね。こんな変な話がありましたよ。これはわたくしにも本当のことはよく判らないんですがね」と続ける。この会話から半七老人が、「津の国屋」は、種の割れた話であるが、本作「あま酒売」は謎を残した話と考えている事が見て取れる。では、何がこの二作を分けるのか。「津の国屋」の幽霊騒ぎも「あま酒売」の蛇の化身の老婆に魅こまれるという噂も幽霊や蛇の化身でなく、共に人間の仕出かした事件であった。ただ、「津の国屋」における殺人ではあくまで物理的な手段を用いているのに対して、「あま酒売」では蛇神の血統の魔力という超常的な力によって人々を奇病に陥らせていた。この蛇神の血統の魔力というものが、本作の事件を「本当のことはよく判らない」話としているのである。一体この蛇神の血統の魔力とは何なのか、作中においては先に引用した以上の説明が為される事は無い。一種超常的なものそのままにおかれるが、このわからなさに対して、憑物というかつての説明原理では万人が納得できないのである。江戸から明治へと時代が移り、近代に突入した中では蛇神の血統やその魔力というものは伝承や言い伝えの類とされて、引き起こされた現象に対しては地に足のついた解釈が必要とされる。半七老人はそうした新しい説明原理の存在にも意識を向けている。最後に「学者がたに聞かせたら、それも一種の催眠術だとも云うかもしれないね」と述べるのがそれである。

半七老人の言う通り、憑物によると思われた不可思議な現象を催眠術と結びつけて説明する視点が「私」が半七老人の話を聞いてい

る明治期には存在していた。一柳廣孝氏は『催眠術の日本近代』で、憑物信仰に催眠術の言葉が使われる様になった事を指摘し、『風俗画報』明治四十一年九月号の「地方異聞」として「催眠術を行ふ種族」と題した次の例を挙げている。

此種族に屬する男女は他人に對して一種の魔力を有し若し他人を見て憎惡嫌忌の情を有する場合は、立ろに之を呪み附け、全く之を魅して單に精神に異狀を起さしむるばかりでなく、或は頭痛、發熱等の症狀を呈し、甚しきに至つては一種の精神病患者となり、其治癒までには數週日を要し、場合によりては、遂に全く死に至るものさへある。だから同地附近でも此種族に屬しないものは之を恐るること非常で、此種族のものとは結婚などするものはない、(中略)勿論學術上の研究を経た譯でもないから、確とは云はれないが、正しく一種の催眠術を行ふものらしく、而して附近の人民が豫め此種族を恐れをるから、何か一寸した事でもあると尚々容易く此種族の術に罹る様な工合に進んで來るのらしい此種族とて最初は決して催眠術など云ふぞを研究して、之を行つた譯ではなからうが、彼らの宗家若くは祖先の一人が偶然に催眠術を行ふことを知り、それが子に傳はり孫に傳はり本家より別家に及び、遂に一村に及び、而してそれを其近隣のもが魔術魔力として其一族と雜婚もせず、交通もしない様になつたものらしい、或は死んだり或は直つても二十

日も三十日もかかるのは、催眠術をかけつばなしで置くからである。⁽⁶⁾

これは、まさに本作「あま酒売」にあてはまる。一柳氏はここから差別が合理化される近代の病理も指摘するが、今そこまでは進めない。注目したいのは、催眠術という言葉を用いても十分に納得のいく説明とはなっていない事である。なぜ催眠術ならこのような現象を引き起こすことが可能になるのかという事は一切説明されない。

何らかの力によって引き起こされたとされる現象に、催眠術という名前を与えただけである。その力を指す言葉が、憑物や魔術魔力という単語から催眠術という単語へと置き換わったに過ぎない。

半七老人も、そこまで催眠術という見方に肩入れしているわけではない。半七自身に無意識の差別がなかったと言いつけることはできないが、それは最終的に近代化されることはなく、本作は怪談のままにとどめられるのである。

注

- (1) 浅子逸男「音菊半七捕物帳―江戸の残党―」(『日本文学』平成十七年十月)
- (2) 引用は、山田清作『未刊随筆百種第十二』(米山堂、昭和三年二月)による
- (3) 堤邦彦『女人蛇体 偏愛の江戸怪談史』(角川学芸出版、平成

十八年六月)

- (4) 戸板康二『歌舞伎名作選 第十四巻』(東京創元社、昭和三十三年十一月)

(5) (3)に同じ

- (6) 引用は、樋田満文・大串夏身・横山泰子『風俗画報：CD-ROM版』(ゆまに書房、平成十四年二月)による

参考文献

- 一柳廣孝『復刊選書七 催眠術の日本近代』青弓社 平成十八年九月
- 堤邦彦『女人蛇体 偏愛の江戸怪談史』角川学芸出版 平成十八年六月
- 山田孝雄・山田忠雄・山田英雄・山田俊雄『日本古典文学大系二四 今昔物語集 三』岩波書店 昭和三十六年三月
- 金子光晴『東洋文庫一一八 増訂武江年表二』平凡社 昭和四十二年八月

「海坊主」小考

高橋 昭 男

安政二年三月四日の昼すぎ、潮干狩りで賑わう品川の沖に不思議な人物が現れた。四十前後の薄汚い身なり、髪振り乱し、画中の仙人と見まごう風体である。いったん姿を消したその人物は、午後四時ごろ再び現れるや、「潮がくる！」「颯風はてがくる！」と叫び、警告して走りまわる。あたりの人々の半信半疑のなか、警告は現実となり、大混乱のうちに皆引き揚げる。最後に残っていた築地河岸の船宿山石の船頭清次は、混乱の最中、船客六人の内のひとりの女が、かの奇怪な人物と話をしているのを目撃する。

この話を小耳にはさんだ半七は、六人の船客に不審をいだき、清次を調べるも手掛かりはなかった。それから二月後、神田川の網船屋の船頭千八の話から、その馴染みの客の打った網にかかったのが、どうやらあの怪人物と思い当たった半七は、似たような話が去年も品川であったことと考え合わせて思案しているところへ、船頭の清次が情報をもたらす。向島の小梅で見かけた女が、あの時の女に間違いない。名はおとわで、木場の番頭を旦那にしており、その住まいを突き止めた、というのである。

小梅の女の家に探りを入れた半七は、庭先にしゃぶったような魚の骨が散乱しているのを見て、生魚を平気でかじると聞いていた、

あの怪人物もこの家にいると確信する。女中のお千代から、この家の一部始終を聞き出した半七は、女の家を踏み込むが、すでもぬけのからであった。お千代から木場の旦那が今夜来るはずと聞いて半七は、手下をそろえて待つ。

木場の旦那喜兵衛とその仲間、江戸湾を荒らし回る海賊の一味であった。そして、怪人物とは何者か。去年の十月、一味が房州の沖でひと仕事した帰り、海中から拾い上げたのがこの男で、一度は海へ抛り込んだのだが、泳ぎが達者で執念深く船の後を追って来るのに恐れをなし、江戸まで連れてきたのである。一味の秘密を感じたかのように、男は執拗にまとわりつき、挙げ句の果てに、小梅の家にも入り込んで、おとわを手込めにしてしまう。

一味の五人が品川の潮干狩りで、男の警告が的中するのを目撃してからは、仕事に出かける時には必ず船に乗せていくと、どういわけか仕事があまくいくというのである。半月ほどたつて、おとわの死骸が羽田の沖に浮かび上がった。

男は上総無宿の海坊主万吉で、子供のころから泳ぎが達者で、二里三里を苦もなく泳ぐところから、海坊主という綽名をとった。悪事を重ねて、二十七八のときに島送りとなり、十年の島暮らしをしたが、耐えきれず海中を泳いで島抜けをする。このとき、房州沖で喜兵衛の船に拾われたのである。おとわ殺しと島抜けの罪で、万吉は引き回しの上、獄門となった。

次に書誌データを記す。

本作は『新青年』大正十三年一・二月号に発表された。初出と本稿に使用した光文社版との異同は次の通りである。

○タイトルが初出は「潮干狩」で、「――江戸探偵物語――」の副題がある。

○光文社版の一の冒頭から十七行分が初出には無く、「これはわたし
が屢々紹介する『半七捕物帳』の一節である」と書き出し、「文
久二年三月四日の午すぎに、不思議な人間が品川沖にあらはれた
と続く。

○事件の年の文久二年は、光文社版では安政二年。新作社版も文久
二年で、春陽堂鉅全集刊行時より変更された。

○初出の(三)の冒頭には、前号のあらずじが八行にわたって記載。

○光文社版三の書き出しに対応する初出の書き出しは「この報告を
聞いて、半七はかんがへた」。

○光文社版四の最後の四行は、初出には無い。

○光文社版一四三頁七行目の「小梅の中の郷」は初出、新作社版と
も「小梅や中の郷」であるが、安政三年版の「向島絵図」によると、
後者が正しい。

○新作社版は、送り仮名、漢字などの異同をのぞけば、光文社版と
同じ文章である。

関東大震災と執筆の動機

大正十二年(一九二三)九月一日に発生した関東大震災で蔵書を
含めた家財の一切を失った岡本綺堂が、被災後二ヶ月にして最初に
書いたのが本作である。被災後の綺堂の動向は『岡本綺堂日記』によっ
て知ることができるが、震災以前の日記はすべて灰燼に帰し、わず
かに七月二十五日から九月一日までが、辛うじて遺されている。九
月一日以降は大混乱の時期に当たり、日記を付ける余裕はなかった。
九月二十三日、「今日から再び日記の筆を執ることにした」と記して、
日記は書き続けられることになる(九月一日は項がたてられている
が、途中までで、翌一日までの記事が記憶により、追記されている)。
高田の知人宅に身を寄せる不自由な生活のなかでは、手元に資料
もなく、執筆にふさわしい静かな環境もなかったから、筆も進まな
かったであろう。震災前の綺堂の執筆活動について、震災前日の八
月三十一日の終りの記事に、次のようにある。

本月の仕事は、臬娘の話(婦人公論、十枚) 朝霜の歌(少女の
友、五枚) 女行者(面白倶楽部、四十二枚) 観客今昔物語(劇
団春秋、四枚) 拷問の話(新小説、二十一枚) 甲字楼夜話(演
芸画報、十七枚) 異人の首(週刊朝日、四十四枚)

物書きとして、売れっ子であったことが一目瞭然であるが、九月
の記事にはさすがに原稿執筆の気配はない。十月に入ると五日の記

事に、博文館の神部君より、『新青年』に江戸時代の探偵の話を書くように依頼されたとある。十月六日には、『新青年』の原稿をかきはじめる」翌七日には『新青年』の原稿をかく。夕刻までに七枚、きのふの分をあはせて十五枚、この原稿なんだか気乗りがしないので、これだけでやめることにする」とある。しかし、十月二十四日には『新青年』の原稿を訂正、あはせて神部君あての手紙をかく」、二十六日には「博文館の神部君が来て、『新青年』の原稿をうけ取ってゆく」となる。ちなみにこの原稿は、「江戸文学に現れた探偵物語」という表題の小論で、大正十三年（一九二二）の『新青年』新春増刊号に掲載されているが、たしかに「気乗りがしない」という綺堂の感想通りの中途半端な作ではある。

ところで、十月十七日に小説掲載の依頼として、『新青年』の神部君から新年号の原稿をたのむといふ郵書が来たが、それは受合ひかねるといふ返書を送る」とあるのだが、実はこの依頼が実現して『半七捕物帳』シリーズの「潮干狩」（「海坊主」の原題）として発表されるので、前出の二十四日の記事に「あはせて神部君あての手紙をかく」とあるのは、おそらく一旦断った新年号の依頼をひるがえして承諾を与えたものと思われる。綺堂の執筆意欲は次第に高まってくるようで、十月三十一日には次のように記す。

本月の仕事は、江戸文学にあらはれたる探偵物語（新青年、十六枚）天から落ちた少年の話（日本少年、十三枚）中臈の死（婦

人倶楽部、二十枚）水野十郎左衛門（講談倶楽部、三十枚）戯曲白井の留守宅（週刊朝日、三十七枚）随分勉強した方である。来月もこのくらゐ書くべき予定になつてゐる。

十月の仕事がはかどつたのは、高田の仮住まいから、麻布十番近くの宮村町の一戸建てに転居し、ようやく静かで落ち着いた環境に暮すことが出来るようになったからである。また生活を立て直すことにより生ずるさまざまな出費が予想され、綺堂は原稿を書き、稼がねばならない状況におかれていたともいえるのではないか。

ようやく十一月三日になると『新青年』の小説三枚ほどを起稿したが、どうも気乗りがしないので、筆をおいて十番を散歩」、六日には『新青年』の原稿をかく。過日三枚ほど書いたものを更に書き足すのである。午後には神部君が来て、新青年の原稿が出来てゐるならば受取ってゆくといふ。今書いてゐるところであるから、八日までにと送ると答へておく」となり、この日は一日中原稿執筆に明け暮れるのであるが、「案外にながくなりさうで困つた」とこぼしている。翌七日になつて、「完結まで書きつゝけることが出来ず、よんどころなく二回に分けることゝし、第一回の方二十一枚だけを速達便で神部君に郵送」するのである。これは『新青年』大正十三年新年号に掲載された。そして第二回分は十二月四日「潮干狩」をかく。午後九時ごろまで息もつかずに書きつゝけて二十枚脱稿、前日の分をあはせて二十七枚」となつて、翌二月号に掲載される。難産の末

の作であった。

本作の初出では、「潮干狩」のタイトルに「江戸探偵物語」という副題が付けられている。これは、すでに書き上げてあった「江戸文学に現れた探偵物語」を受けたもので、『新青年』初登場にあたって、新たな読者への配慮を示したものであろう。「江戸文学に現れた探偵物語」は、捕物帖を読むための手引き書のような内容で、『探偵物語』一作品は江戸文学においては皆無に近いことを説明し、その上で江戸市中の治安制度を奉行所から岡っ引きの下っぴきにいたるまで詳しく解説している。

「潮干狩り」と『世話情浮名横櫛』

物語は江戸市民の物見遊山の平穏な光景から始まる。

この年は三月三日の節句に小雨が降ったので、江戸では年中行事の一つにこだわられているくらいの潮干狩があくる日の四日に延ばされた。きょうは朝から日本晴れという日和であったので、品川の海には潮干狩りの伝馬や荷足船にたりぶねがおびただしく漕ぎ出した。なかには屋根船で乗り込んでくるのもあった。安房上総の山々を背景にして、見果てもない一大遊園地と化した海の上には、大勢の男や女や子供たちが晴れた日光にかがやく砂を踏んで、はまぐりや浅蛸の獲物をあさるのに忙しかった。

この季節、潮干狩りはいつでも出来るのに、三月三日に日を特定しているのは、「年中行事」としての潮干狩りに意味がある。この日を古代中国では、「上巳じょうし」の日として、水辺に出て祓みそぎをした。これが、平安時代の貴族に伝わり、やがて民間では、流し雛の習俗となり、雛祭りにつながっていく。ここで描かれる潮干狩りも、本来は海辺に出て、祓みそぎすることに起源をもつ習俗とむすびついたのである。

斎藤月岑の『東都歳時記』によると、

芝浦・高輪・品川沖・佃島沖・深川洲崎・中川の沖早旦より船に乗じて、はるかの沖に至る。卯の刻より引始て、午の半刻には海底陸地と變ず。こゝにおりたちて蠣蛤かきまぐりを拾ひ、砂中のひらめをふみ、引残りたる淺汐に小魚を得て宴を催せり。

とあって、潮干狩りは浜辺だけでなく、遠浅の海の干潮によって現れる沖合の浅瀬で行なわれていた。したがって、沖合に出来た「海底陸地」にいきなり潮が満ち、突風が吹き荒れることは、そこで楽しんでる大勢の人々を一大パニックに落とし入れることになるであらう。天変地異が前触れもなく突然おそってくることは、作者の綺堂がつい二月前の関東大震災で体験したばかりのことである。

もう一つ、本作を綺堂に書かせた動機が考えられる。それは十五世市村羽左衛門による上演で、当時一世を風靡していた歌舞伎『世話情浮名横櫛』の影響が見られることだ。芝居の発端が木更津であ

り、やがて鎌倉へと移り、今日上演されない六幕目には、主人公の与三郎が島抜けする場面もあって、江戸湾をめぐる舞台上で物語が展開しているのである。また序幕では、土地の顔役の妾お富が木更津の浜見物に出かけて、小間物屋の若旦那の与三郎と出会う「見染め」の場の、はるかに海上を見通す背景の浜辺で、土地の男女や子供たちが潮干狩りに興じている。また、「源氏店」の場で、お富を囲っている多左衛門の次の台詞が見落とせない。

丁度足かけ四年前、魚燈の仕入れに安房上総、銚子へ乗り越す漁船に便船して急ぐ道、浪に漂う一人の女、海賊にでも逢ったのか、たゞし身投げか助げんと、引揚げみれば身内の疵、こいつはたゞ事ではねえと、心づけども仕ようもなく、船へ揚げたで気も緩み、息が絶えたをその儘に、海へ満更また流すは、不便と思つていろいろと手当をするうち甦り、

「浪に漂う女」「海賊」「身投げ」など「海坊主」と共通するキーワードが散見する。一三七頁で半七に「身投げにあつた場合に、それが女ならば引き上げて助けるが、男ならば助けない」と語らせているところも、多左衛門の台詞に対応している。

戸板康二氏は羽左衛門の『与話情浮名横櫛』を評価して、「十五代目市村羽左衛門の最高の当り芸の一つとして、演劇史上にも記録される傑作が生れた。(中略)清元の「かさね」と共に、これはむしろ

大正に完成された文化的遺産である」と記している。この芝居の初演は嘉永六年(一八五三)で、八代目団十郎の与三郎が受けて大当たりを取り、以後しばしば上演されるのであるが、極付けは十五世市村羽左衛門による上演であったことは、今日にいたるまで語り伝えられている。大正も末の時期に書かれた綺堂の「海坊主」の作品世界は、明らかにこの芝居とクロスオーバーしているところがあり、少なくとも本作を執筆するにあたってのきっかけを与えたことは、ほぼ間違いないところである。ちなみに、『日記』の十月九日に「四谷の」おなじみのレストラント・ミカワヤへ這入ると、恰もここで市村羽左衛門に逢った。羽左衛門は京都大阪方面の不景気をしきりに説いて、この際とても巡業の見込はないから、来春までは引籠つて休業するつもりだと云つてゐた」とあって、歌舞伎の世界に深くかかわっていた綺堂は、東京はおろか地方までが、震災によって興行が不可能になっている歌舞伎界に思いをつのらせたことであろう。そして羽左衛門に逢つてからしばらくして、『新青年』新年号の執筆依頼を受けるのであるが、何かのうちに当時の評判劇で、江戸湾一帯を舞台とする『与話情浮名横櫛』のストーリーの展開に気がついて、強い刺激と示唆を受けたのではないか。

おとわの旦那は喜兵衛というもので、表向きは木場の材木屋の番頭と称しているが、実は深川の八幡前に巣を組んでいる海賊であった。(中略)手下の船頭どもを使って品川や佃の沖のかか

り船をあらしていた。時には上総房州の沖まで乗り出して、渡海の船を襲うこともあった。おとわは木更津の茶屋女のあがり、喜兵衛の商売を知っているながら其の困い者になっていたのである。

「おとわが木更津の茶屋女あがり」と設定されているが、これは木更津の顔役赤間源左衛門の妾であるお富の反映であろう。ちなみにお富の前身は深川の芸者富吉であった。与三郎の店の屋号が伊豆屋というのも海にちなんだものであろう。海賊喜兵衛の稼ぎ場も、江戸湾一帯に設定されており、「時には上総房州の沖まで乗り出し」ていたが、その「外房州の海上から拾いあげて来た」のが怪人物たる「海坊主の万吉」である。

人のようなものが浪をかいて彼等の船を追ってくるのを見た。人か、海驢（あしか）か、海豚（いるか）かと、月の光で海のうえを透かして、どうもそれは人の形であるらしい。伝え聞く人魚ではあるまいかと、

引き上げてみると、それはまぎれもなく人間であり、江戸へ連れて行けとせがむ。

こんな者を連れて帰ってもしょうがないので、喜兵衛は残酷に

彼を元の海へ投げ込ませると、かれは再び浮き出して、執念深く船のあとを追ってきた。それが大抵の魚よりも早いので、喜兵衛もなんだか恐ろしくなってきた。迷信の強い彼等は、この怪しい男をすてて帰って、それがために何かの禍いをまねくことを恐れたので、再び彼を引き上げさせて、とうとう江戸まで連れて帰ることになった。

そして潮干狩の日、海坊主の万吉の天変地異を警告する異常なる行動と、突然の天候急変となって人々を恐怖に落とし入れた予知能力の凄さに、一味の者どもは畏れおののくのである。

その以来、かれらは仕事に出るたびに、かならずこの怪しい男と一緒に乗せてゆくことにした。彼を乗せてゆくと、いつも案外の良い仕事があるので、かれらの迷信はますます高まった。

天候の予知能力と魚も顔負けの遊泳術とを兼ね備えているということは、「板子一枚下は地獄」の海上でたつきを得ている海賊たちにとっては、十分に畏怖の対象となるのだった。

海という自然の脅威

そもそも本作は、『半七捕物帳』のシリーズのなかでも、かなり異色の作品である。まず本舞台が江戸市中の街中とか、郊外の田園地

帯ではなく、海岸もふくめた江戸湾一帯であり、海辺や川辺の地名が目につく。品川、築地河岸、芝浦、柳橋、神田川、隅田川の上、源兵衛堀、小梅、中の郷、深川八幡、木場、佃、木更津、上総房州、九十九里浜、伊豆の島、神奈川と、舞台が広汎にわたっているところが特徴である。さらに海賊という意表を突いた犯罪者集団が登場すること。主人公が小悪党であるにもかかわらず、きわめて異能であつて、身体的な強靱さと、予知能力にたけたカリスマ性をそなえた、一種のスーパーマンであること。もう一つ、平和な日常が突如天変地異により破壊される理不尽が、作品の底流にあることは、作品のタイトルが初出ではのどかな物見遊山である「潮干狩」であつたことにもあらわれている。当然、それは関東大震災直後の社会的状況と、綺堂自身が被災者であつたことに由来する。関東大震災は相模湾を震源とする巨大地震で、一〇メートルを超す津波も観測されている。被災者でもある綺堂にとつて、海という自然への脅威は並大抵のものではなかつたであろう。ちなみに、書誌データ記したように、事件の年を文久二年から、後年、安政二年に変更したのは、この年の十月に江戸が「安政の大地震」に襲われることを暗示しているのかもしれない。

『海坊主』は『平七捕物帳』中の秀作とは必ずしも言えないが、「海坊主の万吉」という異常な人物が設定されるにおよび、これまでのシリーズにないドラマティックな内容の小説に仕上がつたといえる。探偵小説に欠かせない要素である「怪異」あるいは「怪異現象」を、

綺堂は「海坊主の万吉」に託したものとみえる。
そして綺堂は後年、タイトルを「海坊主」に変えた。

海坊主とは、各地の沿岸部でいわれる海の妖怪のことである。海坊主の名は土地ごとの民俗資料や、江戸時代を中心にした隨筆にも数多く見えており、海上でそれを見ることは不吉であるとされている。船を沈没させたり、人を海中に引き込んだり、さらに「柄杓を貸せ」といつて現れたり、様々である。(村上健司『妖怪事典』⁴)

海賊たちの海坊主の万吉への畏怖の感情をもたらしただけで、やがて彼らを破滅に至らしめる目に見えぬ何か巨大な力であつた。それこそ「海坊主」そのものが持つ威力であつたと言えるのかもしれない。

「海坊主」は海の脅威が、擬人化されたシンボルであつた。

注

- (1) 岡本綺堂『岡本綺堂日記』(青蛙房、昭和六十二年十二月)
- (2) 斎藤月岑『東都歳時記』(ワイド版東洋文庫 平凡社、平成十五年九月)
- (3) 引用は、以下の戸板康二の解説も含め『歌舞伎名作選 第六巻』(東京創元社、昭和二十九年八月)による。

(4) 村上健司『妖怪事典』(毎日新聞社、平成十二年四月)

参考文献

『名作歌舞伎全集』第十六巻 東京創元社 昭和四十五年七月

「旅絵師」小考

岸 本 梨 沙

「旅絵師」は大正九年七月に『文芸倶楽部』(博文館)に発表され、大正十年六月に『半七聞書帳』(隆文館)全九編に収録された。この九編の内、後に六編は半七の手柄話として書きかえられたが、「槍突き」「小女郎狐」「旅絵師」の三編は聞書帳の形で残っている。

半七老人の話は文政四年(一八二二)五月十日の朝、房川の渡にさしかかった場面から始まる。房川を渡る船から落ちた若い娘、おげんを救ったのは船に乗り合わせた旅絵師の山崎澹山だった。そのことに甚く感謝したおげんの父、伝兵衛は澹山を抑留め座敷へ誘う。そこでその親子と澹山の行き先が同じであることがわかると相談はすぐにまとまり、澹山は伝兵衛父子の一行に加わり奥州を旅することになった。道中、伝兵衛は澹山に自らの屋敷に逗留し路銀を稼ぐことを勧めた。澹山はそれを喜び、伝兵衛の屋敷に逗留しながら絵の仕事を請け負い過ぎていた。ただ用人の倅から受けた西王母の絵が描けず澹山は悩んでいた。またおげんは助けられた恩からか、澹山に必要な以上に親切にしているようだった。

この山崎澹山、実は吹上御庭番の間宮鉄次郎で、奥州へ来た目的はこの土地の領主の御家騒動を調べるためだった。ゆえにその城下町に潜入できたことは澹山としても願ったり叶ったり、おげんの親

切は甚だ煙たいものではあったがその目的のため、澹山はじつと耐えていた。

澹山が伝兵衛の家に身を寄せてから三月後のある日の夜、澹山は伝兵衛に連れられ古い弁天堂へ赴く。そこで伝兵衛が澹山に見せたものはマリアの絵像だった。顔色の変わった澹山を余所に、伝兵衛はこのマリア像を模写してほしいと頼む。その時の伝兵衛の顔は神々しく威厳があり、澹山はそれに威圧されて模写することを承諾してしまう。伝兵衛はその代わりとして澹山の身の安全と、調査の協力を約束するのだった。

それから一月後、マリアの絵像は完成し、澹山の調査も首尾よく解決した。しかし人に調べさせたものだけを持ち帰ることは無責任、と伝兵衛の屋敷で年を越すことを澹山は決めるのだった。それと同時に描けずにいた西王母の絵に再び取り掛かる。

そんなある日の夜、おげんは澹山の部屋を訪れていた。その部屋に雨戸を叩く音が響く。障子を細く開けたおげんはあつと叫んで澹山を庇う様に両手を広げた。澹山が見守る中、槍で突かれたおげんは絶命した。伝兵衛は、犯人はおげんに懸想していた荒木千之丞であると推測し敵討を誓う。澹山は伝兵衛に言われるまま、屋敷を出立しおげんの三七日まで領分さかいを越えた宿に逗留した。暫くの後、隣国の用人の若い俵が何者かに闇討ちにされたという噂を耳にし、肩の重荷が下りた心持になり、そのあくる日出立した。

それから五年後、澹山は奥州のある城下町で切支丹宗門が磔刑に

されたという噂を耳にするのだった。

異同として、初出と初刊では冒頭部分が半七老人の一人語りから、新作社版では半七老人と「私」の会話形式になっていることが挙げられるが、他に特記すべき異同はない。

この「旅絵師」において多くを割いて描かれているのは澹山と伝兵衛父子の關係、その結果としておげんが殺害されるまでの経緯だ。このことからわかるように「旅絵師」の主たる事件と言っているのはおげんが殺害される事件である。しかし澹山はおげんの殺人事件に対して半七のような役割を担わない。それもそのはずで、澹山が奥州へやってきた理由は御家騒動に対する調査をすることであり、おげんの事件に対する調査をすることではない。澹山は伝兵衛に言われるまま事件の顛末をその目で見ることなく奥州を後にする。

澹山と伝兵衛父子との關係が描かれる時、重要な役割を担っているものは「御禁制の邪宗門」、キリスト教だろう。キリスト教を禁止する側である筈の澹山(間宮)はキリシタンを捕えるどころかマリアの絵像まで描いてしまっている。彼らキリシタンとの關係を経て澹山、間宮にはどのような変化が齎されたのだろうか。

キリシタンとは

江戸時代、キリシタンが幕府により禁止されていたことは周知の事実だが、「旅絵師」で登場する伝兵衛父子は潜伏キリシタンと呼ばれる存在だ。潜伏キリシタンとは「江戸幕府がキリスト教禁止令を

出した慶長十八年(一六一三)から信仰を表明して復活した慶応元年(一八六五)までの約二百五十年間にわたり禁圧・迫害のため潜伏を余儀なくされたキリスト教信徒^①だ。彼等は様々な制度に自分を組み込みながら信仰を続けたため「キリスト教と神仏との習合は避けられず、次第にシンクレティズム(混成宗教)化の道をたど^②ることとなった。

彼等キリシタンへの史実への登場は十七世紀に集中しており、十八世紀以降になるとその数は大幅に減少している。しかし姉崎正治は「他處は知らず、九州には宗門は潜伏してゐた。それが幕府の末に近づくに従つて段々顯はれて、明治初年の大問題に連續した。」と述べている。このように「旅絵師」の舞台となった文政四年は再びキリシタンの問題が浮上し始めた時代に当てはまるだろう。

ではキリシタンではない者達にとつて、キリシタンとはどのようなものだったのか。姉崎は幕末に至つた時点での有司のキリシタンへの無知さを指摘した上で「此の如くにして、一般民衆は、いやな感じを以てバテレンとかキリシタンといふ名を覚えてゐるのみ。有司は、魔法で、人の國を取るといふ様な、空漠の概念を抱いて、事に臨むのである。」^③と述べる。また大橋幸泰は「十七世紀中期以来一世紀以上の長い時間を経て、この間、島原天草一揆の強烈な印象のため、キリシタンは奇怪な魔力を持つ怪し気なイメージが増幅され、怪しげなものは何でもキリシタンのものとされるようになっていた事実が注目されなければならない。」と述べ、「妖しげなイメー

ジの肥大化したキリシタンの姿と、体制に従順な現実の潜伏キリシタンの姿とがあまりにも乖離してしまつた。」^④と述べている。これらことからキリシタンに対する知識は乏しく、またその印象も曖昧であつたことが伺える。

これらのことから山崎澹山(間宮鉄次郎)はキリシタンをよく知らず、実体のない得体の知れないものであると考え、それゆえの不気味さのようなものを感じていることがまず言える。さらに澹山の年齢からキリシタンを知りえない時代に生まれ、江戸というキリシタン禁制を行う幕府のお膝元である空間に住まう者として設定されている。それでもキリシタンが再浮上する時代に設定することにより、キリシタンについては非常に曖昧な、ある意味では岡本綺堂がよく用いる妖怪のような存在として認識している存在として描かれているのではないだろうか。

また「旅絵師」が書かれた大正九年頃、そのキリシタンはどのような状況に置かれていたのか。明治六年(一八七三)明治政府によりキリシタン禁制の高札が撤去される。これにより表面上、キリシタン禁制は撤廃された。そのため明治後半から大正にかけてキリシト教信者は増加し、大正二年には上智大も創設されている。^⑤文壇の上でもキリシト教への着目はされている。明治四十年代には北原白秋や志賀直哉、有島武郎、武者小路実篤、大正期には倉田百三や賀川豊彦などがあげられる。^⑥その中でも「旅絵師」と同時期、大正九年五月には芸術至上主義的側面のある芥川龍之介が「黒衣聖母」を

発表しており、「禍を転じて福とする代りに、福を転じて禍と」した麻利耶観音（黒衣聖母⁸）に関わる出来事が描かれている。

山崎澹山の見るキリシタン

「旅絵師」には三人のキリシタンが登場する。千倉屋伝兵衛、その息子伝四郎、娘おげんの三人だ。澹山の彼等への見方は彼等がキリシタンであるとはわかる前と後で変化が齎される。伝四郎に関する記述は少ないため論ずることはできないが、伝兵衛とおげんの二人に関して考察していきたい。

当初、伝兵衛に対する見方は「見るから健やかな、いかにも温和らしい福相をそなえた老人」とあり好印象を持っているようだ。また絵の仕事の世話をしてくれたり屋敷に宿泊させてくれたりと、隠密の仕事上、伝兵衛の存在は澹山にとって非常にありがたいものだっただろう。

しかし伝兵衛にキリシタンだと暴露される場面から見方は変わり、「彼の顔は神々しく輝いているように見られた。澹山は一種の威厳にうたれて、おのずと頭が重くなるように感じ」ている。その結果として、澹山は伝兵衛の言葉の前に屈してしまう。

おげんに対しては「どこことなく薄のろいようにも見えるおとなしい娘」という印象を持っていたが、キリシタンであることが発覚した後には次のような印象を受けるようになる。

小賢しい江戸の女を見馴れた澹山の眼には、何だかぼんやりしたような薄鈍い女にみえながら、邪宗門の血を引いているだけに、強情らしい執念深そうな、この田舎娘に飽くまでも魅こまれたら、結局はどうしても彼女の虜になるのではないかと、自分ながらも一種の不安を感じて来た

このような見方をし始め、おげんを避けようとする。

このように、当初、澹山にとって二人の存在、特に伝兵衛の存在は自分の任務を円滑に進めるための手段でしかなかった。しかし彼等がキリシタンであることを知った後は伝兵衛に神々しさや威厳を感じ、おげんには虜になってしまうかもしれない不安を感じる。もちろん伝兵衛、おげんは何も変わっていない。変わったのは澹山の二人を見る目に他ならない。

山崎澹山の「目」

澹山の目の変容を象徴的に物語っている場面がある。それは澹山が再び西王母に取り掛かる場面だ。

不思議にその西王母の顔が、かのマリアの顔に肖てくるので、彼は自分ながら怪しく思った。幾度かき直しても絵絹の上にはマリアの顔が、ありありと浮き出して来るので、彼は自分もいつの間にか切支丹の魔法に囚われてしまったのではないかと

疑った。

キリシタンとの邂逅を経て澹山の目には西王母がマリアに映る。何故、澹山の目にはこのような変化が起こったのか。改めて山崎澹山とはどのような存在なのか。また澹山に化けた間宮鉄次郎とはどのような存在なのか、これらを元に考えていきたい。

間宮は今年二十五歳になる隠密、幕府の間人だ。このことから間宮は江戸の内側に住む人間、江戸の内側の存在と言える。ただ隠密の特殊性は半七老人が冒頭で次のように語る。

この隠密という役はまったく命懸けで、どこ藩でも隠密が入り込んだことに気がつくとか、かならずそれを殺してしまします。もともと秘密にやっただ使ですから、見す見す殺されたことを知っていても、幕府からは表向きの掛け合いは出来ません。所詮は泣き寝入りの殺され損になるに決まっていたものです。

幕府の間人でありながら幕府からある意味で独立した特殊な立ち位置にすることがわかる。このような存在である間宮は旅絵師の山崎澹山に化ける。

旅絵師はこの話の題にもなっており、本文中では「その頃の旅絵師といえば、ゆく先々で自分の絵を売って、それを路用としてそれからそれへと渡ってゆくのが習いであった。」と述べられている。こ

のことから旅絵師には一所に留まらない、放浪する印象が与えられているとわかる。つまり旅絵師には普通の絵師同様の芸術家という側面、さらに隠密である間宮が持つことのできない江戸の外側の存在という側面が付与されている。このことから間宮と澹山は正反対の存在だと言えるだろう。

あくまでも澹山の存在は隠密の仕事上、必要な変装に過ぎない。だが間宮が絵師の澹山として悩む場面がある。それは澹山が始めに西王母を描く場面だ。西王母を描こうとして描けない現状を前に澹山は次のように言う。

しかし、どうも出来ないものは仕方がないので、まあ、まあ、幾たびでも描き直して、これなればと自分でも得心のまいるまで根よくやってみるよりほかはありません。

この澹山の言葉と類似した台詞を岡本綺堂は「修善寺物語」の夜叉王に言わせている。それは次の通りである。

「御用をうけたまわって最早小半年、未熟ながらも腕限り根かぎりに夜昼となく打ちましても、意にかなうほどのものひとつも作りあげることが出来ませぬ。更に打ち替え作り替えて、心ならずも延引に延引を重ねましたる次第、なにとぞお察しく下さりませ」

夜叉王は「芸術至上主義的な性格」^⑤であるとされているが、そんな夜叉王と澹山は芸術家という点で似通った存在として描かれている。つまり隠密である間宮は、あたかも本物の芸術家のような思考をしまつてしまっていることになる。ただこの時点では絵を描くことより隠密の仕事を優先する描写があり、まだ澹山は間宮の演技と取れないこともない。

しかし伝兵衛父子がキリシタンだと発覚した後、澹山はマリアの絵像の模写に「魂をうち込」む。この時点で既に隠密としての禁忌を犯しているが、さらにその後キリシタン発覚前とは違った次元で芸術家としての側面を見せる。それは先で引用した西王母がマリアに肖てくる場面だ。このことに関して「修善寺物語」に夜叉王の言葉として次のようにある。

幾たびか打ち直してもこの面に、死相のありありと見えたのは、わが技の拙いのではない、鈍いのでない。源氏の將軍頼家卿がこうなるべき御運とは、今という今になって初めて覚った。神ほとけならでは知ろし召されぬ人の運命が、まずわが作にあらわれたは、自然の感応と言おうか、自然の妙と言おうか、技芸神に入るとはまことにこの事であろうよ。伊豆の夜叉王は我ながら日本一じゃ、天下一じゃのう

芸術家の手は本人の意思とは無関係のところまで真実を映し出す。

これと同じような現象が、澹山が描いた西王母にも起こっているのではないだろうか。つまり西王母とマリアは同じような存在である、と澹山が認識し、それが澹山の意思とは関係無いところで絵に現れたのではないか。

ではマリアと西王母が曖昧になることほどのような意味を持つか。マリアと西王母は共に信仰の対象となる存在であり、さらに外国から流入してきた存在、女性という共通点を持つ。しかし双方に対する幕府の対応は正反対のものだった。西王母は許容され、マリアは「御禁制の邪宗門」になる。このことは幕府とキリシタン、内側と外側の対立構造を暗示しているのではないか。そしてこの二つが澹山の中で曖昧になるといことは、内側の存在である間宮と外側の存在である旅絵師の澹山との区別が曖昧になったことを意味するのではないだろうか。つまり江戸の内側の存在と江戸の外側の存在との区別が澹山の中で曖昧になったのではないか。

このように澹山の中で内側と外側が曖昧になった原因は、伝兵衛にキリシタンだと暴露されたことだろう。この時の伝兵衛とのやりとりの中で澹山は伝兵衛に対し「彼の顔は神々しく輝いているように見られた。澹山は一種の威厳にうたれて、おのずと頭が重くなるように感じた。」や「その一刹那の澹山はただ何がなしに相手に威圧されてしまったという方が事実になかった。」「おごそかに云った。」という印象を受けている。もちろん、これらの前提には前述した得体の知れないものへの不気味な印象はあつただろう。しかし「神々

しく「威厳」「おごそか」など、得体の知れないものへの不気味さというには説明し切れない一種の神聖さ、畏れが澹山の印象の中には含まれている。この時、澹山が伝兵衛に神聖さや畏れを感じた理由は場の雰囲気もあるだろうし、伝兵衛との年齢差もあるだろう。また不気味なだけのはずだったキリシタンが実際に澹山の前に現れた時に、普段はただの好々爺でありながら信仰のことになると雰囲気さがらりと変わった落差もあるだろう。そして何より伝兵衛の「命懸け」の信仰心からくる凄みも澹山を圧倒したのではないか。間宮は隠密として「命懸け」で任務に当たっているが、伝兵衛のそれは間宮のそれよりも数段に凄まじい迫力があつた。伝兵衛の方が圧倒的に強く自分の力など遠く及ばないと感じ取つたのではないか。そして、それは内側の力など所詮内側Ⅱ江戸でしか通用しない力であるということの実感でもあつただろう。

「仕合わせであつたか不仕合わせであつたか」

奥州からの帰り、再び房川を渡つた澹山はおげんの冥福を祈ると同時に彼女が自分に救われたことが「仕合わせであつたか不仕合わせであつたか」を考える。

「不仕合わせ」だと考えた時に、おげんの無駄死にが言える。澹山が隠密だと知っている読者からすればすぐに行き当たる「不仕合わせ」だろう。澹山は隠密であり庇う必要はなく、そのため死ぬ必要もなかつた。実際澹山はおげんの背後から素早く飛びのいている。

ただこの時のおげんの行動はキリスト教の教えそのものだったと言えるのではないか。キリスト教で愛は「他者の幸福のために人間として抱く愛情、心配、願望といった強い感情。」であり、「キリスト者の信仰と行動の最高の表現」とされている。

こう考えるとおげんは「仕合わせ」だったと言えるのではないか。しかしキリスト教を知らない澹山がこれを知るわけがない。おげんは死ぬ間際、澹山の顔を「うっとり」と見つめているうちに「息を引き取る。この「うっとり」とした表情こそ澹山が、おげんが「仕合わせ」だと考えた要因ではないだろうか。「修善寺物語」で夜叉王は娘の死を前にして「姉は死ぬるか。姉も定めて本望であろう。父もまた本望じゃ。」と言う。何故なら姉はかねてからの願いだつた出世が叶い、父は自身の技が「神に入」つたからだ。この時、夜叉王の「眼は歡びに輝いて、娘も「こころよげに笑つ」ている。そんな二人の姿は死よりも重い、優先されるべきものがあることを物語る。この二人の表情とおげんの「うっとり」という表情は重なるものがあるのではないか。「うっとり」という表情がおげんの「命懸け」の「本望」を物語っているのだろう。そして「命懸け」の「本望」を遂げることできたおげんの姿こそが「仕合わせ」だつたのではないだろうか。この時注目すべきは澹山の中で起こつた変化だろう。前者のおげんの無駄死には澹山が隠密、間宮の化けた存在であることが前提だからこそ言える「不仕合わせ」だ。しかし後者はそれとは趣を異にする。「命懸け」の「本望」を遂げたことと、隠密としての「命懸け」

の任務を成功させることは繋がる部分もあるだろう。ただ間宮にとつて任務とは死んでもいい「本望」になり得たのだろうか。そう考えると、娘の死を目前にしながら悲しむでもなく怒るでもなく「本望」を喜ぶ夜叉王の姿に「仕合わせ」を考える澹山の姿は重なるのではないだろうか。そしてこの姿は隠密の間宮では見せることができない、旅絵師の澹山として「仕合わせ」を考えた姿だろう。このように澹山は隠密という江戸の内側の存在として思考を巡らせるのと同時に、旅絵師という江戸の外側の存在としても思考を巡らせる。前述の通り、澹山の中で内側と外側の境界が曖昧になっているのだらう。

そして五年後、奥州でキリシタンが磔刑にされたことを聞きおげんは「仕合わせ」だったと澹山は考える。おげんは「本望」だと思いつながら死んだ。しかし磔刑にされたキリシタン達は「本望」ではない。キリスト教を知らない澹山にとつて死んだら天国へ行く、などという知識はない。磔刑になった者達が、信仰を最後まで続けるという「本望」を遂げられなかった、その「仕合わせ」を思い、おげんは「仕合わせ」だったと考えたのではないだろうか。

ただその裏で、澹山はおげんの無知さを羨んだのかもしいれない。父と兄が磔刑にされたことはもちろん、彼自身は内側の存在であり続けられなかった、そのことを思ったのかもしいれない。

注

- (1) 『国史大辞典』（吉川弘文館、昭和五十四年三月～平成九年四月）
- (2) 前掲『国史大辞典』
- (3) 姉崎正治『キリシタン宗門の迫害と潜伏』（国書刊行会、昭和五十一年十月。原本、大正十五年六月）
- (4) 前掲『キリシタン宗門の迫害と潜伏』
- (5) H. チークリス・太田淑子編『日本史小百科（キリシタン）』（東京堂出版、平成十一年九月）
- (6) 五野井隆史『日本キリスト教史』（吉川弘文館、平成二年九月）
- (7) 米倉充『近代文学とキリスト教 明治・大正篇』（創元社、昭和五十八年十一月）『増補改訂 新潮日本文学辞典』（新潮社、昭和六十三年一月）
- (8) 菊池弘、久保田芳太郎、関口安義編著『芥川龍之介事典』（明治書院、昭和六十年十二月）
- (9) 河竹登志夫監修、古井戸秀夫編『歌舞伎登場人物事典』（白水社、平成十八年五月）
- (10) ドナルド・K・マッキム『キリスト教神学用語辞典』（日本キリスト教団出版局、平成十四年十二月）

参考文献

- 岡本綺堂『平七捕物帳 第三輯』新作社、大正十二年十一月
芥川龍之介『奉教人の死』新潮社、昭和四十三年十一月

清水絃一『キリシタン禁制史』教育社、昭和五十六年九月

岡本綺堂『修善寺物語』光文社、平成四年三月（初出、明治四十

四年一月）

「少年少女の死」小考

小山 恭 平

「少年少女の死」では作中、半七により子どもにまつわる二つの事件が語られるが、これらの事件は元は『半七聞書帳』として別個に発表された作品であった。前半部「踊の浚い」は『新小説』大正七年十月号に、後半部「蛙の水出し」は『サンデー毎日』大正十一年夏期増刊号にそれぞれ発表された。二つの作品は「子どもの死」という共通要素により取りまとめられ、現在の形となり『半七捕物帳』第三輯に収録された。本稿では「少年少女の死」の前半部を「第一の事件」後半部を「第二の事件」と称する。時系列的には前後してしまうが、ここでは分かりやすさを優先させた。

梗概は以下の通りである。

半七の家を訪れた「わたし」は、子どもが被害者となった自転車事故に憤る半七に、過去の二つの事件のあらましを語られる。

・第一の事件

元治元年三月、外神田の田原屋という貸席で、藤間光奴という踊り子による、大浚いが開催された。

大浚いは天気恵まれ盛況し、滞りなく進行していたが、午後四時に幕開け予定の「靉猿」に出演する予定だった娘おていが、女中や姉が目を離れたすきに姿を消す。

内弟子たちが総出で家を探したがおていの姿は見つからず、隠しの可能性も検討されたが、そこに居合わせていた半七により、軒下からおていの死体が発見される。

半七は手拭いに残ったおはぐろを手がかりに、女中頭のおはまが犯人であると推理する。

おはまは過去子どもを取りあげられたトラウマから周囲の子どもに危害を加えるようになってしまった危険人物であり、偶然目についたおていに殺意を抱き、突発的に殺害してしまったことを白状した。

・第二の事件

慶応三年七月、同じ水出しで遊んでいた子どもが相次いで急死した。その死を不審に思った半七は捜査に乗りだし、子どもたちの死が、山城屋の後妻が水出しの口に塗った毒によるものだと明らかにした。

このように「少年少女の死」で語られる二つの事件では、計三名の子どもが理不尽な死を遂げる。なぜ個別に発表された作品を一つにまとめてまで、子どもの死を列挙する必要があるのだろうか。

本稿では作品内の諸要素を考察し、この作品における子どもという存在やその死の意味、また、二つの作品を一話にまとめた理由を明らかにしていきたい。

自転車

ここでは論考に入る前にまず、冒頭半七と「わたし」が話題にしていた自転車事故について触れる。

現在自転車はごく一般的な乗り物として認知されているが、明治期、自転車は民衆にとつて恐怖の対象であった。江戸末期の慶応年間に日本に伝来した自転車は明治に入ると庶民の間で人気を博し、貸し自転車屋が繁盛した。しかし明治一〇年代はまだ自転車は貸し出すものであり、個人所有は行われていなかった。日本自転車普及協会自転車文化センターの学芸員の谷田員一男によれば明治十二年に東京府内で一〇六三台確認されていた自転車は全て貸し自転車屋のものだとされている。

本格的な普及は明治二十五年以後である。この頃から自転車の輸入を取り扱う代理店が数多く誕生し、アメリカから多くの自転車が日本に流入してきた。明治三五年には東京府内で六二二九台の自転車の保有が確認されている。

自転車の保有台数の増加に伴い、作品冒頭のような自転車事故の件数も増加していった。明治二十年には自転車による負傷事故は一九九件、死亡事故は四件と少数であったが、明治二十五年には負傷事故が一五二件、死亡事故が十一件に増加し、明治三十年には負傷事故百三十四件、死亡事故が三十四件にのぼった。この翌年警視庁が自転車取締規則を定め、罰則付きの法令化が各地で相次いだ。

作中で「わたし」は「その頃は自転車の流行り出した始めて、半

七老人のいう通り、下手な素人がここでも此処でも人を憐れたり、扉を突き破ったりしていた」と述べているが、半七と「わたし」が交友していた明治二十年代末は、まさに自転車の危険性が社会に認知され始めた時期である。

自転車流入以前はまともな交通ルールすら持たず、往来を自由に歩いていた人々(明治期の始めにはそもそも道路に歩道すらなかった)に、自転車という鉄の固まりはそれまでにない恐怖をもたらした。おそらく「交通事故」という概念はこの頃誕生したのではないだろうか。明治二十年代末において自転車事故はもつとも想定しやすい「災難」の一つであったと考えられる。この頃に行う災難話の導入として、自転車事故は最適な話題であったと言える。

「災難」

半七は「少年少女の死」の冒頭、「わたし」に対し、これから語る事件を「飛んでもない災難にあつた子供」の話であると表現している。半七にとって、「少年少女の死」で語られる二つの事件がどのようなものであるかを正しく理解するため、この章ではまず、「災難」という、類語が多くややこしい言葉の意味を厳密に定義する。

「災難」は辞書により多少の違いはあるが、基本的には「予期せぬ災い」という意味を持つ語とされており、一般的にもその意味で用いられているが、ここでは、作中における「災難」の意味を明らかに

にしなくてはならない。

その手がかりとなるシーンが冒頭に存在する。

「下手なサイクリスト」を罵倒していた二人は以下のようなやり取りをする。

「それでも大人ならば、こつちの不注意ということもあります
が、まったく子供は可哀そうですよ」

「子供は勿論ですが、大人だって困りますよ。こつちが避ければ、
その避ける方へ向こうが廻ってくるんですもの。下手な奴に逢っ
ちゃあ敵いませんよ」

「災難はいくら避けても追っかけて来るんでしょうね」

半七は、たとえ相手の責で被害を受けても、こちらが年齢相応の自衛を怠っていたのなら、それは「災難」ではなく「不注意」であり、相手が避ける方向へ廻ってくるなど、異常な事態が起こって初めて「災難」と認定されるとしている。

こちらの不注意が被害の原因ならば、注意をしていればその被害は防げたはずであり、事前の注意で防げた事態を災難とは言えない、と半七は定義しているのだ。つまり「災難」は予測不能でなくてはならないということである。

右記のように作中での「災難」の意味は基本的には辞書に準拠し

ているが、こちらに自業自得の要素があつてはならないことと、予測・回避が不能でなくてはならないことがより強調されている。

「災難」である事件

探偵小説や捕物帳で描かれる傷害殺人事件では通常、その「犯人」と「被害者」に何らかの関係性が付与されており、その両者の関係のもつれやこじれが事件の動機を生みだす。

しかし作中の二つの事件はその定型から逸脱している。

第一の事件の犯人であるおはまは子どもに対する害意を持つ異常者であり、その害意はある特定の人物ではなく、「子供」というカテゴリそのものに向けられている。被害者であるおていは、おていという個人ではなく「子供」として被害されたのだといえる。まず個人として識別されていないのだが、そこに人対人の関係性などありえない。事件を引き起こしたのは二人の関係性ではなく、おはまという犯人ただ一人の異常である。

事件発生の要因が被害者に一切ない、という点において二つの事件は共通している。

第二の事件の犯人であるお菊は、先妻の子に殺意を抱き、その子の玩具である水出しの口に毒を塗る。結局お菊は殺人という行為におそれを抱き、計画を中止するが、その水出しは意図せぬ形で顧客の息子の手に渡り、二人の子どもを死なせてしまう。

第一の事件と同様、犯人であるお菊と死んだ子ども達には、何の

関係性もなく、その死の原因は全てお菊の側にある。

二つの事件において被害された子どもは、一方的な被害者である。事件発生の要因は全て加害者の側にあり、被害を受けた子ども達の行動に、落ち度といえるようなものはない。

二つの事件で子ども達が受けた被害は、先章で明らかにした「災難」の定義に当てはまっており、これらは半七自身が述べているように、「災難に逢った子供」の話であると言える。

「子供」が招き寄せた災難

先章で二つの事件が「災難」の定義に該当することを明らかにしたが、その災難を引き寄せたのは、被害者の「子供」という条件である。

第一の事件の被害者であるおていは、もしも子どもでなければ、子どもに対する害意を持つおはまに殺害されることはなく、また、第二の事件の被害者である二人の子どもも、子どもでなければ毒の塗られた水出しに興味を抱くこともなかった。

二つの事件において災難を招来したのは明らかに「子供」という条件であり、「子供」と「災難」は結びついている。

半七はなぜこのような特殊な事件を二つ並べたのだろうか。

「子供」

半七は冒頭、「下手なサイクリスト」を罵倒しながら以下のように

述べる。

「それでも大人ならばこちらの不注意ということもありますが、まったく子供は可哀そうですね」

大人ならば被害者の側にも責は存在しうるが、被害者が子どもである場合、その責は絶対に加害者の側にある、と半七は述べているのだ。半七にとって子どもとは絶対的な被害者であり、「可哀そう」な存在なのだと「言える」。

この極端な意見に説得力を持たせるために、半七は「子供」と「災難」が結びついた特殊な事件を「わたし」にまとめて語ったのではないだろうか。

半七は無辜な子どもが、子どもである、というただそれだけの理由で被害に逢った事例を挙げることで、不運に対する耐性を持たない「子供」の脆さや悲劇性を強調し、「子供」が「可哀そう」であると訴えているのである。

事件を二つ語ったのは、そのような「災難」は特殊な事例ではなく、普遍的な事態であると「わたし」に認知してほしかったからだと考えられる。

半七にとって子どもとは絶対的な被害者であり、「可哀そう」な存在である。半七はその持論の正当性を「わたし」に主張するため、

子どもが子どもであるという、ただそれだけの理由で害された理不尽な事件を二件まとめて語ったのだ。

事件の被害者であるおていや由松達は個人としてではなく、「子供」というカテゴリとして存在しており、その死は「子供」という存在全体の危うさや脆さの暗喩として機能している。

「靱猿」

先章までで、この作品におけるテーマは「可哀そう」な子どもであるとしたが、そのテーマは作中おてい達が演じようとした「靱猿」により強調されている。

「靱猿」の梗概は以下の通りである。

家来を伴い狩りに出かけた大名はその道中、猿曳きに出会う。以前から靱に猿皮を張りたいと思っていた大名は猿曳きを弓矢で脅し、彼が連れていた小猿を取り上げる。大名は早速小猿を殺そうとするが、小猿の無邪気な仕草に胸打たれ、小猿を猿曳きに返す。猿曳きは喜び、礼に猿を舞わせる。

「靱猿」の作品内で人間という上位存在の気分に生死を左右される小猿の境遇は、二つの事件で大人達に翻弄される子どもと近似している。作者は「靱猿」を作出すことにより、暗喩的に子どもの悲劇性を強調したのではないだろうか。

親と子供

半七は第一の事件の後日談を以下のように語る。

「無論に死罪の筈ですが、上でも幾分の憐れみがあったとみえて、吟味相済まずというので、二年も三年も牢内にながれていましたが、そのうちにとうとう牢死しました。大和屋も気の毒でしたが、おはまもまったく可哀そうでしたよ」

子どもを殺したおはまにずいぶんと同情的であるし、上の軽い処罰も妥当なものだと了承している。この「憐れみ」は、我が子を取り上げられたという、おはまの過去に向けられたものである。おはまは自分とほとんど無関係な子どもを幾人も害し、ついには殺害してしまった犯罪者であるが、それでもなお同情の余地が残るほど、子どもを失うという過去は作品世界においては「可哀そう」な事態なのである。

子どもを失った親は第二の事件の中でも描かれている。第二の事件で我が子を取った父由五郎はその死を受け入れることができずに正気を失い、無実の女房を責め立て、自殺にまで追いこんでしまう。由五郎はその後自棄酒を飲むようになり、仕事にもでなくなる。子どもの死が一家を破滅させている。

二つの事件で共通して描かれている、子どもを失った親の狂乱は、親にとって子どもという存在の価値がいかに高いかを表しているの

ではないだろうか。

しかし子どもは誰にとっても価値ある存在というわけではない。第一の事件の犯人であるおはまは我が子を取り上げられたことで精神に異常をきたすほどの喪失感を抱いたが、他人の子であるおていは欲動のままにあっさり殺害した。また、第二の事件でお菊は先妻の子を邪魔に思い、水出しの口に毒を塗って殺害しようとするんだ。

子どもはある人にとっては価値ある存在であるが、その価値を認めない人間にとっては、単に脆弱なだけの存在でしかない。二つの事件の犯人であるおはまとお菊は共に母親になり損なった女であるが、子どもへ無慈悲な攻撃をくわえる彼女達の姿は、子どもを奪われ嘆く被害者達の親と対照的である。この二つの事件で描かれているものは、実の子へ深い愛情を注ぐ大人と、自身と血縁関係のない子どもへ冷酷に対応する周囲の大人の対比であるとも言える。大人の価値観に生命を左右される子どもの弱さがこれによって強調されているのではないだろうか。

参考文献

- 今内孜『半七捕物帳辞典』（国書刊行会、平成二十四年一月）
谷田貝一男『日本における自転車交通安全対策の変遷』「自転車文化センター研究報告書」第四号（日本自転車普及協会自転車文化センター、平成二十四年三月）

「二つ目小僧」小考

市 地 英

「二つ目小僧」は、怪談と見せかけた事件を半七が暴く構造に特徴のある作品である。初出は大正十三年七月『サンデー毎日夏季特別号』、初出と初刊の事件年次は慶応元年（一八六五）だが、昭和四年に刊行された春陽堂版全集で嘉永五年（一八五二）に改訂されている。半七三十歳のとき、十三番目の事件となっている。

旧暦八月十四日、四谷伝馬町で小鳥を商う野鳥屋に、草履取りを連れた旗本風の侍が現れ、金十五両の鶉を求めた。野鳥屋の主人喜右衛門は手付の一両を貰い、残りが屋敷で払われるので、日暮れに草履取りに連れられて新宿新屋敷に鶉を届けることになる。屋敷は昼間の身なりのいい武家と印象が異なり、荒れたものであった。案内された座敷で、残りの十四両を払ってもらえるか不安に思いながら待っていたところ、喜右衛門は二つ目小僧らしき化け物に遭遇し、その恐怖から半ば失神してしまう。気が付くと喜右衛門の枕元に用人の男が座っており、屋敷に時々不思議があるが、他言無用にしてほしい、そして鶉を持ち帰るように、と告げた。恐怖にかられた喜右衛門は鶉籠を抱えて急いで逃げ帰るが、その晩から大熱を発し、半月ばかり床につくことになった。ようやく快方した頃、喜右衛門は例の鶉の鳴き声が変わっていると気付く、名鳥が駄鶉にすり替え

られていたことを知る。内々に調べようと再度屋敷を訪れると、当該屋敷は空屋敷で武家など住んでいなかった。こうして十五両の鶉が騙し盗られたことが発覚し、喜右衛門は訴え出た。

喜右衛門の訴えを受けて、半七が子分の松吉と新宿新屋敷の探索をすることになった。山の手の空屋敷に商人を連れ込んで、様々な手段で品物を巻き上げる事件が広範囲で多発していたため、半七はその中の一件だと見当をつけていた。怪談を演出して品物を騙し取るという特異な手口だったが、喜右衛門から聞き取りをし、半七は二つ目小僧はなにかで片目を塞いだ者が、化け物のような恰好をしたのだらうと推理する。空屋敷の様々な場所を探索した結果、按摩の笛が発見され、半七は二つ目小僧の正体が片目の按摩だと見破る。その推理をもとに松吉に調査させたところ、周悦という不良少年の片目の小按摩が年に似合わず金遣いが荒いと分かり、吟味すると二つ目小僧を演じていたと白状した。そして、下駄屋の藤助、御家人の糠目三五郎、渡り中間の権平、浪人の馬淵金八らによって事件が計画実行されたことが明らかになり、空屋敷を利用して品物を強奪していた犯人グループが捕まって、一件落着となる。

本作は二章構成となっており、右の梗概は一つめの段落が一章の内容にあたり、二つめの段落が二章の内容にあたる。

蓋を開けてみれば詐欺事件でしかない一件だが、喜右衛門が怪談じみた手口で鶉を騙し盗られる一章には『怪談老の杖』の一つ目小僧の怪談が下地にされ、かつ怪異の恐怖を引き起こす描写が散りば

められている。また、半七捕物帳シリーズの冒頭は、多くが明治に半七老人が、新聞記者である「わたし」に自らの経験を語り始める形式をとっているが、「二つ目小僧」は一章でいきなり江戸の喜右衛門の経験から始まり、それから二章で半七の捜査があつて、一つ目小僧の正体が割れた時点で、明治の半七老人による事件の解説に切り替わる。二章構成の中で、現象を実態調査によつて解明し、本質を明らかにする、という流れが明確な形式になっているのである。

こうしたことから、一章での怪談は、二章での半七の捜査や明治の半七老人による種明かしで「暴かれる」構造となつてゐる。

本稿では、「二つ目小僧」の「暴かれる」構造に焦点を当て、何故怪談じみた一件が「暴かれる」ことで解決したのか、考察したい。

「小島屋怪異に逢し話」と「二つ目小僧」

柴田宵曲は青蛙房版『半七捕物帳 巻の二（昭和三十一年）』の巻末に「半七ばなしの背景」と題して、捕物帳の原典をいくつか紹介している。その中で、「二つ目小僧」の原典は『怪談老の杖』であると指摘されている。

江戸後期の戯作者、狂歌師である平秩東作（享保十一年（一七二〇）—寛政元年（一七八九））が著した『怪談老の杖』は全四巻の怪談集であり、該当する怪談は「小島屋怪異に逢し話」という題で一巻に収録されている。内容は半七「二つ目小僧」の一章とほぼ合致するが、概略は次の通りである。

四ツ谷の小島屋喜右衛門という人物が、麻布の武家に鶉を売つた。代金の不足分を屋敷で渡すということになり、喜右衛門は鶉を持参することになった。屋敷に着くと、鶉だけ持っていかれて、座敷で待たされた。天井に雨漏りの痕がところどころ黴で、敷居や鴨居もここかしこ下がつており、襖も破れている家なので、喜右衛門が内心、鶉の代金をきちんと払ってくれるのかと心配しながら待っていると、いつの間にか十歳くらいの小僧が室内にいた。小僧は床の間にかけてあつた紙表具を巻き上げてはばらばらと落とす、ということは何度も繰り返した。その様子を見かねた喜右衛門が掛け物を損ずるから自分が片付けよう、と申し出ると、その小僧は振り返つて「黙つていよ」と言つた。振り返つたその小僧には目が一つしかなかった。喜右衛門がわつと言つて倒れ、氣を失つたところ、屋敷の者が驚いて、急いで駕籠に乗せて家まで送り返した。その後鶉の代金は届けられ、病んだ喜右衛門のもとには使者が度々懇ろに訪ねてきた。その使者によれば、屋敷にはそれまでも四、五度怪しいことがあり、春にも小僧が殿様の部屋で菓子を食べたり、誰何すると黙つていよと言つて消えたという。黙つていよは何も悪いことはないとのこと。その後喜右衛門は二十日ほど快氣し、何も変わったことはなかった。その屋敷の名を聞いたが、よからぬことがあるといけなから記さない。²⁾

四ツ谷という地名、喜右衛門という人名、小僧が座敷に現れて掛け物を巻いては落とすことを繰り返す、声をかけると「黙つていよ」

と言う。この話の流れは、「一つ目小僧」一章の怪談じみた一件とほとんど同じである。綺堂が『怪談老の杖』を参照したかは定かではないが、「小島屋怪異に逢し話」を原典にしていることは間違いないと考えられる。

ところが、「小島屋怪異に逢し話」という江戸の怪談話を下地にしているものの、小島屋ではなく野島屋に変更し、時代を半七が岡っ引きとして活躍した江戸後期に合わせて、時と場所を変更してしまっている。原典とはまた違う話である、という体裁なのである。

原典と「一つ目小僧」を比較すると、前者にはない要素が「一つ目小僧」に盛り込まれていることが分かる。それは次の五点である。

一点目、武家が鶉を購入して喜右衛門が屋敷まで届ける過程。原典では詳しく書かれていないが、「一つ目小僧」では侍の服装や、草履取りを連れていくことなど人物描写が詳しく、喜右衛門が上客として武家を信用する根拠を示している。また、理由をつけて、夜、人気のない地域の屋敷に届けさせる約束をする、草履取りがわざわざ案内に来る、といった喜右衛門と犯人グループのやりとりは、原典にはないものである。

二点目、小僧の描写。原典では唐突に小僧が現れ、容貌について「眼ただひとつあり」とだけある。「一つ目小僧」では廊下から小僧が喜右衛門のいる座敷に入ってくる登場経路が示されており、容貌についても「茶坊主は左の眼ひとつであった。口は両方の耳のあたりまで裂けて、大きい二本の牙が白くあらわれていた。」と詳しい。

三点目、時間帯。原典では時間帯は記されていないが、「一つ目小僧」でははっきり夜である。

四点目、屋敷からの懇ろなアフターケア。原典では代金がすつかり払われ、取引が成立するが、「一つ目小僧」では鶉の取引まで断られる。もとより犯人たちは鶉を騙し取る算段であったのだから、「一つ目小僧」で喜右衛門をきちんと送り返したり現金を届けたり使者が様子を見に来て事情を話したりするわけがない。

五点目、怪談的な描写。「一つ目小僧」では喜右衛門が怪談じみた一件を経験する一連の過程に、雨や暗闇といった恐怖を喚起する描写が散りばめられている。

一点目は犯人グループの存在と誘導の意図を匂わせ、二点目は一つ目小僧の描写を詳しくすることで、拵え物の怪談を示唆している。三点目は犯人グループが夜の方が騙しやすいという犯罪を行う都合と、夜自体が怪談を喚起する装置になっている。四点目は鶉を騙し取った犯人たちの当然の処置といえる。五点目は怪談的情緒を想起させる描写であり、喜右衛門の主観的な恐怖を織り交ぜることで怪談と事件の曖昧な境界を作り出している。一点目から四点目までは事件性を窺わせ、怪談を利用した事件を成立させる要素といえるが、五点目は怪談性を連想させる描写であり、冒頭の怪談じみた一件には事件性とは異なる要素が盛り込まれていると分かる。

一点目から四点目のような、犯人の意図を思わせる要素が盛り込まれているのに関わらず、「一つ目小僧」の一章が怪談らしい雰囲気

をもつのは、喜右衛門が鶉を届けに新宿新屋敷に向かって逃げ帰るまでの間に、五点目の怪談的な描写が織り交ぜられているからである。

その描写を抜き出してみると、喜右衛門の行動と運動していることが分かる。

【鶉を届ける約束をした】

「午後からの雲の色がいよいよ暗くなって、今にも小雨がほろほろと落ちて来そう」

【新宿新屋敷に向かう】

「細かい雨がふたりの額のうえに冷たく落ちてきた」

「小雨の降る秋の宵で、さびしい屋敷町は灯のひかりも見えない闇の底に沈んでいた」

【座敷に待たされる】

「雨はしとしとと降りつづけて、暗い庭さきでは虫の音がさびしくきこえた」

「縁側に小さい足音がひびいて、明けたてのきしむ障子をあけて来る音があった」

【二つ目小僧と遭遇して恐怖に駆られて逃げ帰る】

「雨はまだ降っている。自分の後ろからは何者かが追ってくるように思われる」

天候や風景といった環境描写が主であり、喜右衛門を取り巻く環境が不安や恐怖をもたらすことを示している。喜右衛門が鶉を届けることになってから逃げ帰るまでの間、雨がずつと降り続け、夜、人気のない新宿新屋敷方面の、手入れの行き届いていない暗くて静かな空屋敷では、雨の音や虫の音、足音や戸のきしむ音などが強調されて、喜右衛門の恐怖感を喚起する。つまり怪談性は環境がもたらす喜右衛門の主観であり、犯人グループの掌中に落ちてしまう喜右衛門の怯懦の根拠になっているのである。

このように、一章は怪談が下地になっているが、犯人方の誘導の意図がみられる事件性描写と、喜右衛門の主観にやや寄った怪談性描写が織り交ぜられることで、犯罪としての出来事が示されている。怪談らしい雰囲気がありつつも、「騙された」という結論に行き着く流れになっているのである。

鶉と按摩の笛

怪談の渦中であつた喜右衛門が被害に気付く過程では、鶉の鳴き声が必要な鍵となっている。

まず、鶉は鳴き声を競わせる愛玩動物であり、武家や好事家に好まれた鳥である。金十五両の価値は鳴き声で決まっていたといつて

よい。「一つ目小僧」中には金十五両の鶉の鳴き声は一度も出てこないが、駄鶉の方の鳴き声は喜右衛門が熱を出して快方に向かったときに登場する。

喜右衛門は鳴き声の変化に気付いた後、自らの店の者の餉い方が悪かったのではないかと疑う。鶉がすり替えられていることを確認しても、店の者が盗った可能性を疑っている。このことから、屋敷で一つ目小僧に遭遇した出来事を、喜右衛門は怪事として捉えていたということが分かる。喜右衛門は怪談の渦中にいた。その恐怖とは、自然現象や環境に脅かされた心理から発露している。空屋敷の暗さや静かさの中で、雨の音や虫の音、足音や戸のきしむ音が喜右衛門の周辺を取り巻いていた。「暗闇に何かがある」という気配をもたらず「音」の渦中に支配されていたことから、喜右衛門は一つ目小僧を化物として認識するに至っていた。

しかし、怪事と捉えていたところに、鶉の鳴き声という違和感が差し入れられたことをきっかけにして、喜右衛門は半信半疑になり、数々の誘導の節から屋敷ですり替えられた可能性を疑い始める。「命より大事な」鶉が、金十五両の価値を失っていたという事実が、喜右衛門を現実へ引き戻すのである。

「損をさせられた」という商人としての一大事、このことによって、「喜右衛門が損をする」Ⅱ「向こうが得をする」という理屈が成立し、怪談じみた経験の端々にみられる犯人グループの意図を辿ることができるようになる。そして、判断能力を取り戻した喜右衛門は、空

屋敷へ向かい、怪談がでたらめであったことを確認するのである。

このように、鶉をすり替えたことで、犯人たちは「駄鶉」という証拠品を喜右衛門に与えてしまった、とみることが出来る。この契機によって、「怪談」は「事件」としての枠組みを持つようになる。そして、もう一つ、犯人たちが残している重要な証拠品が、物語を解決へと導く役割を果たしている。後に二章で半七の捜査によって発見される、按摩の笛である。

按摩の笛は、小按摩周悦によって残された証拠品だが、これが半七の手に渡るため、一つ目小僧の正体が暴かれることになる。江戸後期の風俗を記した『守貞謄稿』の按摩の項目には「諸国盲人、これを業とする者多し。あるひは盲目にあらざるもあり」とあり、また、「振り按摩は小笛を吹くを標とす。」とあって、流しの按摩は小笛を吹いていたと示している。按摩の笛は、流しの按摩が自分の存在を知らしめるために吹くものであり、シンボルといえるものである。周悦は大事な商売道具を落してそのままにしていたのだが、それによって自分の存在を半七に教えてしまう。按摩の笛は、半ば不可解だった事件の内幕を決定的に明らかにする鍵となるのである。どちらも「音が鳴るもの」である鶉と按摩の笛は、物語を動かす装置となっている。鶉が鳴くことで、喜右衛門の商人としての現実的感覚が呼び覚まされ、「怪談」から空屋敷で鶉を騙し取られた「事件」に移行する。按摩の笛によって一つ目小僧の正体が特定され、不可解な「事件」が具体化して「解明」される。価値としての鳴くもの、

人に存在を知らしめるものとしての音が鳴るものは、その人工的なあり方によって、環境がもたらす恐怖を破って人間の現実的な感覚を呼び覚まし、あるいはその存在の正体を知らしめるものとして、「暴く」過程を浮き彫りにしているのである。

一つ目小僧の正体

では、一つ目小僧の正体が暴かれる裏には、どのような背景があるのだろうか。

喜右衛門の怪談じみた一件が主題の「一つ目小僧」だが、二章の捜査とその解明で、本質的な事件は空屋敷で商人を狙って品物を強奪する事件が多発していたことであつた、と分かる。ところがその中の一つにすぎない怪談の一件で、事件はあっさり解決されることになる。半七老人も「つまらない怪談をやらなければ、もうちつと寿命があつたかも知れないんですが」と言っている。何故、一つ目小僧の一件が露見したことで、犯人グループの足がついたのだろうか。

これは、「一つ目小僧」に片目の小按摩の周悦を取り入れたことにあると考えられる。

按摩とは、中国から伝来した鍼術・灸坪の医学であり、その職の名である。盲人の生業としては江戸前期に杉山和一（慶長五年（一六一〇）—元禄七年（一六九四））という按摩が將軍綱吉に寵遇されたことで確立し、広く定着したという。⁵⁵『守貞謄稿』には「小兒の按

摩は、あるひは「上下揉みて二十四文」など呼ぶもあり。」とあつて、その中には子供もいたことが窺える。⁵⁶

周悦はそのような片目の小按摩である。作中では周悦の母の存在が語られており、周悦が子按摩として手に職を持ちながら、親元にいることが分かる。こうした、母に「隠れて」悪事に手を染めている不良少年という、悪事と悪戯の区別が曖昧な子供を利用したことによって、犯人グループの仕組んだ怪談は犯罪としての綻びをもつことになるのである。

下駄屋の藤助らは、一回、一つ目小僧の一件の仕事をして以来、同じ手口を使わない。同じ手口を使うと足がつきやすく、彼らが空屋敷の体裁を整えるために草刈をしておくぐらいには慎重に犯罪を行っているからである。ところが、周悦は一つ目小僧の一件以後も、「面白がつて」何か役をやらせてくれと下駄屋にせがんでいる。周悦にとつて、一つ目小僧を演じることは悪戯の延長のようなもので、犯罪意識が希薄なのだ。

空屋敷を利用した犯罪は、屋敷を転々として慎重に繰り返していたことで、足がつかなかったといえる。ところが、油断が生じて取り入れた怪談の興は、子供の浅はかさをも取り入れることになった。周悦は自らを明かす象徴的な按摩の笛を容易に落とし、放つておく。そして、犯罪意識が軽いことから「一つ責めると、みんな正直に白状」してしまい、「一つ目小僧」の正体が自分だと明かしてしまふ。

一つ目小僧の正体が割れると同時に、事件の内容は明らかになる。

犯人グループ自体も具体化する。按摩の笛が発見された時点で、明治の半七老人の種明かしに切り替わるのは、そんな陳腐でお粗末な内幕が暴かれるからであり、それによって怪談が瓦解すると同時に、事件も解決への運びとなるのである。

怪談と探偵小説

このように「一つ目小僧」は怪談じみた一件が暴かれる構造になっており、怪談から事件へ、一つ目小僧の正体から犯人グループの正体へと移行する流れがあるといえる。一つ目小僧が登場する一章は、恐怖を喚起する環境が取り巻くという五感に訴える普遍的な表現が織り交ぜられている。物語の主体がそのような主観をもつことから、胡散臭いともいえる犯人グループの行動があるにも関わらず、物語は怪談性を失わない。その一方で、怪談性は商品としての鶺鴒をもつ「価値」という人工的な感覚によって破られ、事件としての枠組みを持ち、更に按摩の笛という象徴的な証拠品から、怪談と事件の正体が暴かれる。そして、子供の犯罪意識の欠如という、実にお粗末な内幕から、犯人グループの正体は明らかになるのである。

これらの構造や表現によつて、「一つ目小僧」は単に怪談を取り入れた探偵小説というより、「暴かれた怪」という筋を読める作品になっている。怪談と事件の内幕が表裏一体となり、双方が活きる作品となっているのである。

注

- (1) 初刊は『平七捕物帳 第五輯』（新作社、大正十五年九月）
 (2) 平秩東作「怪談老の杖 巻二」小島屋怪異に逢し話（『新燕石十種 第三巻』国書刊行会、大正二年二月）から稿者が現代語訳、要約した。

- (3) 林英夫・青木美智男編集代表『事典 しらべる江戸時代』（柏書房、平成十三年十月）

- (4) 吉田川守貞「守貞謄稿」天保八年（一八三七）—嘉永六年（一八五三年）（『近世風俗志（二）』宇佐美英機校訂、岩波書店平成八年五月）による。

- (5) 加藤康昭『日本盲人社会史研究』（未来社、昭和六十年四月）
 (6) (4) に同じ

〈参考文献〉

- 浅子逸男「江戸残党後日傳——『平七捕物帳』の世界——」『國語と文學』第八十四卷第十二号、至文堂、平成十九年十二月
 今井孜『平七捕物帳辞典』国書刊行会、平成二十二年一月
 柴田宵曲『奇談異聞辞典』筑摩書房、平成二十年九月
 村上健司『日本妖怪大事典』角川書店、平成二十二年八月
 笹間良彦『大江戸復元図鑑〈庶民編〉』遊子館、平成十五年十一月
 三好一光編著『江戸生業物価事典 新装版』青蛙房、平成十四年十二月

秋庭隆編著『日本大百科全書』3 小学館、平成四年一月

浜田雄介・加藤文明子・鄭智恵・本田逸朗・高橋昭男・岸本梨沙・小山恭平・市地英
共同研究 半七捕物帳 (三)